

---

# 見習い勇者

零堵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見習い勇者

### 【Nコード】

N3240Q

### 【作者名】

零堵

### 【あらすじ】

魔王が復活したので、無理やり旅立つことになった勇者仲間と魔法使いと僧侶をGETして、旅立ちます  
ちなみに語り部が、勇者の味方ではありません

〜第一章〜勇者と仲間のお会い〜（前書き）

無理やり旅立つことになった勇者、彼の災難続き？の物語が始まりますw

〈第一章〉勇者と仲間の出会い

世界は、暗黒に包まれようとしていました・・・その原因は、魔王が復活したからである・・・

それに立ち向かうべく、三人の伝説の戦士達が立ち上がったのであった・・・

ここは、とある村の平凡な一軒屋

ここに勇者と名乗る者がいました・・・

「俺は、勇者だ・・・って、なんで俺が勇者だ！」

何故、彼が勇者だと言うと、彼の父親が言うには、彼のおじいちゃんが魔王を倒した伝説の勇者だったからである。まあ、彼の事をまわりの皆は、勇者と呼んでいるのでそうなってしまったのであった。

「たく・・・何で、俺が勇者なんだよ・・・」

またまた父親が言うには、魔王が復活したので倒しに行つてこいと、強制命令を出し、勇者を家から追い出して、旅立つ事になったのでした。

「くそ・・・拒否権無しかよ・・・」

まあ、それも運命です、あきらめなさい。

勇者は、とりあえず旅立つ事にしたのでした・・・  
しばらく歩くと、道端に一人の少女が倒れていました。

勇者は、彼女を助けました

「おい！大丈夫か？しつかりしろ」

「う・・・は！」

彼女はいきなり気がついて、辺りを見渡しました。

「そうか・・・魔王が復活してしまわれたのね・・・」

「は？」

勇者には、彼女の言っている事が解りませんでした。

「もしかして貴方が伝説の勇者様ですか？」

「え・・・まあそうだけど・・・何で解った？」

「だって、ここに勇者って書いてありますけど？」

少女は、胸の辺りを指差します。

勇者の胸の辺りにネームプレートが貼り付けてあって、

勇者と書かれていたのです。そしてこの服をくれたのは彼の父親  
です

「あのくそ親父・・・！」

勇者は、父親の事を恨みました。

「本当に貴方は勇者の方ですか・・・？」

「まあ、間違っではないけど・・・俺は一応勇者かな？」

「本当ですか！私は、旅をしてる魔法使いです、是非勇者様の仲間  
に加えて下さい！」

「・・・何故？」

「実は、私は魔王に祖国を滅ぼされたんです・・・だからその敵  
討ちに修行していました・・・」

そんなある日、伝説の勇者様の噂を聞いたんです！お願いですから  
仲間にして下さい！」

「・・・まあ仲間が増えた方がいいからな、OK！」

こうして魔法使いが仲間になりました。

しばらく歩いていると、敵に遭遇してしまいました。

「俺の名はボロツク！グヒヤヒヤヒヤ！お前を殺す！」

「て、敵〜！？ど、どうしよう！」

どうしようってここは戦うしかありません。ちなみに勇者のHPは16  
マジックポイント  
MPは0です、はつきり言って弱すぎです。

「とりあえず戦ってみるしかない！」

勇者は装備していた剣で、ボロツクに刃を向けました。

「そんなもんに俺がやられるか！とりゃ！」

ボロツクは、力を溜めて思いっきりパンチを繰り出しました。

「うわ！」

剣は一発でボロボロになりました

「グヒヤヒヤヒヤ、もうお前に守るべき物は無いぞ！どうする？」

「お待ちなさい！」

そこに一人の少女の声がしたのでした。

「なんだあ？」

「私は正義を愛する僧侶！よって悪しき物を成敗いたします！」

「なんかヒーロー物とかに出てくる台詞を良くもまあ恥ずかしがらないで言えるなあ・・・」

「とう！」

僧侶は、何所からロッドを取り出し、ボロツクに投げつけたのでした。

「ぐふ！」

ロッドはボロツクの腹に刺さり、大穴を空けました。

「ぐぎゃああああ！！！」

ボロツクは、叫び声をあげ、消滅しました。

「ふう、何とか終わったわ・・・えつと・・・貴方、大丈夫？」

「まあ、何とか・・・けど・・・」

「けど？」

「僧侶のくせに、そんな野蛮でいいのか!？」

「うん 良いの、好きでやってるから」

「おいおい……」

「ん？貴方は……あの伝説の勇者様ですか!？」

「え……？何で名前も言っていないのに？でも俺は勇者だけど」

「ここに書かれてありますけど？」

勇者の胸の辺りにネームプレートが貼り付けてあって

勇者と書かれていたのでした、そしてこの服をくれたのは彼の父親です。

「それですか！」

「貴方は勇者様なんですね？なんでも魔王を倒し、正義の者として崇められた」

「それはおじいちゃんだけど、まあ勇者って事には変わりないかな」

「じゃあ是非、私をお供に連れて下さい、私は正義の味方というのに、憧れてたんです、是非お願いします！」

彼女は、目をキラキラさせながら言うのでした

「……まあいいか、一人より三人の方が心強いし」

こうして僧侶が仲間になったのでした。

## 第二章　悪魔との出会い

前回の話を言いますと、勇者は魔法使いと僧侶を仲間にしたのでした。

まあ仲間が集まったって、勇者が弱いつて事にはかわりないんですがね？

「おい……！誰が弱いつて！」

「まあまあ勇者様、そう怒らないで下さいよ」

「そうですよ、怒るとしわが増えますよ？」

「俺はそんなに老けてないわ！！！」

そんなこんなで旅を続けています。

はたして彼等は、復活した魔王を倒せるのでしょうかね？しばらく歩いていると、二つの道が現れました。

それはどっちかに行けとか言う、命令みたいなものでした。「うーん……困ったな、どっちに行くかだな」

「私は右の道に行った方が良いと思いますよ」

「私は左の道を行きたいです」

勇者は、らちが空かないので、魔法使いと一緒に右の道へ行くのでした。

「こつちの道で良かったんだか・・・」

「まあ先を進んで行けばどうにかかりますよ」

魔法使いはるん気分ですべていますね。どうやら彼女には、この先何が待ち受けているかどうかは関係が無いように見えます。

「まあ良いか、何が来てもどうせこの世の中じゃ怖い物なんて無いしな」

勇者はそんな事を呟きました、すると・・・敵が現れました。種族は悪魔らしいですよ  
どうします勇者様？

「貴様・・・ここは通さん！成敗致す！」

何故か悪魔なのに礼儀正しいです、何ででしょうね？

「勇者様、悪魔ですよ！どうします？」

「どうするって言われてもな・・・逃げるっきゃないだろ！」

だから貴方は一応、勇者なんだから戦わなくてどうするんですか？  
ま、弱い勇者に何言っても無駄ですね。

勇者は、必死に悪魔から逃げる事にするのでした

「貴様・・・敵前逃亡とは！情け無い奴め！成敗いたす！」

悪魔は、勇者達の事を追いかけるのでした

しばらく時間が過ぎました。さてどうなったのかと言つと・・・

「すみません・・・参りました・・・ぜえ〜ぜえ〜」

悪魔はどうやら体力が無かったみたいです。息を切らして、はあはあ言っています。

「は〜っはっは！これは作戦だったのだ！覚悟！」

魔法使いは、こう思いました。

(いや・・・絶対作戦なんかじゃ無いわ…)

ごもつともです、勇者は装備していた剣で悪魔に攻撃しました。

「食らえ！てんくうざん天空斬〜〜！！」

はい？何ですかその技は？

勇者は思いつきり、ジャンプして、悪魔に切りかかったのです。

「ぐはああああ、武士とは死ぬ事と見つけたり〜！！」

いやいや貴方は武士じゃないです、悪魔です。悪魔は、叫び声をあげて、消滅しました。

「ふ〜何とか敵を倒したな・・・」

「勇者様って・・・」

魔法使いは、そんな事を呟いていたのでした・・・  
それから進んでいくと、また分かれ道があったので、左の道へ行く  
のでした。

「なんかえらく雑草とかが多いなあ・・・」

「まあ獣道けものみちですからね、雑草も多い事でしょう」  
勇者達は、そのまま歩き続けました。しばらくたつと、敵が現れま  
した。

「我こそは全治無能の悪魔なり！いざ尋常に勝負！」

「おゝい・・・また変なのが出てきたな・・・」

「勇者様、敵ですよ！敵と言えば悪！そう悪です！成敗いたしまし  
よう！それが私達正義の味方ですから！」

僧侶は目を輝かせて言うのでした。

「・・・はいはい熱血してるのは、解ったから落ち着こうね・・・」

「こら！人の話を無視するな！」

人じゃないです、悪魔です。悪魔は怒った顔をしています、どうし  
ます？勇者様

「どうするって、そりゃあ戦うでしょ・・・一応勇者だし」

その通りです勇者様、勇者は剣を構え戦う体制に入りました。

「悪を倒す我ら！正義の勇者メンバー！いざ勝負」

僧侶はのりのりで、恥ずかしい台詞を言っています。彼女に恥じらいとかは無いんでしょうか？

「食らえ！死の旋風！」

悪魔は、手から風を起こし、勇者達に攻撃しました。

「甘いわよ！そんなもんによられる私では無いわ！」

僧侶は、じゃんぷして空高くに飛び上がりました。

「飛翔力高いなあ・・・でも・・・」

勇者はこう思いました。

(あんなに高く飛んで着地はどうするんだろ?)

もちろん着地は失敗しました。

どうやら計算に入れて無かったみたいです。

「いったあぁいいゝ・・・」

自業自得です、僧侶は頭を抱えて痛がったのでした。その光景を見ていた悪魔はこう思ったのでした

(こいつら物凄い馬鹿だ...)

「・・・こんな奴らに戦っても意味が無いな！さらば！」

悪魔は、ぱっとその場から消えたのでした。

「結局何だったんだ・・・？」

「見ましたか！勇者様、私の技で悪魔を倒しましたよ！凄いですよね？」

え？あれ技だったんですか？どう見たって徒の着地失敗なだけじゃないですか？

「まあいいか・・・」

勇者はため息をついて、先に進む事にしたのでした・・・

## 第二章「悪魔との出会い」(後書き)

悪魔との出会い、結局勇者は何もしていないような？  
感想くれるとうれしいです。

### 第三章 ある町の出来事

勇者達は、歩き続けて町に入りました。

町の名前は、ロックンロールって言っらしいです。  
なんか変な名前ですね

「何でもいいよ・・・休めるなら」

「やっぱりここって音楽とかが流行してるのかな？」

魔法使いは言いました、それを聞いた勇者はこう思いました。

(何でこいつはそういうの知ってるんだ??)

まあ、さておき勇者御一行は、ロックンロールと言う町に侵入した  
のでした。

「えらく殺風景な町だなあ・・・」

「そうですね・・・でも音楽が聞こえませんか？」

魔法使いは、まだその事にこだわっているみたいです。

「そんな事はどうでもいいとして、とりあえず町長の家に行ってみ

ましようよ？何か魔王の情報が聞けるかも知れませんし」

「そうだな・・・そうするか」

勇者達は、町長の家に行くのでした。

町長の家は、町の奥にありました、中に入るといきなり

「誰だ！」

と叫ばれて、勇者達は驚いたのでした。

「お、俺達は怪しいもんじゃないです」

十分怪しいです、はい。自分から怪しいって言っているような物ですよ？

「お前等・・・魔王の手先か？」

「何て事言つのですか！私達は正義を愛する者達なんですよ！」

「・・・はい？」

「だから私達が悪って事は絶対に有りえないのです！」

僧侶は、またもや熱く語っています。

やっぱり彼女には、恥じらいと言つのは、全然無いみたいです。

「こんなふざけた手下がいるわけないか・・・悪かったな、疑ってしまつて」

「ちょっと待て！こいつと一緒にするなあ〜！」

「え〜何ですか？勇者様〜！」

「無駄な喧嘩ねえ・・・」

魔法使いは、ぼそりと呟いたのでした。

そして時間が過ぎて、何とか落ち着いたので、町長に、色々聞く事にするのでした。

「貴方はこの町の町長ですよね？」

「まあそうだが？」

「じゃあ、この町ってえらく殺風景じゃないですか？一体どうしたんですか？」

「それは話すと長くなるが・・・この町に怪しい術者が来て、この町を変えてしまったのだ・・・」

「そうだったんですか・・・」

「丁度良い、お前等に頼みたい事がある」

「はい？」

「この町にはプラスバンド館と言う屋敷がある、その屋敷にいる術者を退治してはくれないか？」

「解りました、術者を退治しましょう」

勇者は、町長の依頼を受けたのでした。

「ところで勇者様？」

勇者達は、歩きながらプラスバンド館を目指しています。  
そんな時、魔法使いが話し掛けて来たのでした。

「なんだ？」

「術者を退治するって言うてたけど、勝算あるの？」

うんうんそうですね？なんせあの弱い勇者ですから、勝ち目なんてあるわけないと思いますし？

「何とかなるって、たかが術者だし？」

おお？勇者、今の問題発言ですよ？

世界中の術者を敵にまわしたようなものですよ？

「大丈夫です！正義を愛する心があればきっと勝てますって！」

おーい・・・まだ僧侶は熱血してるみたいですねー

そんなこんなで時間が過ぎ、プラスバンド館に着いたのでした。

「ここがプラスバンド館か・・・」

「早速中に入りましょう、勇者様」

「よし！勇者御一行！出陣！」

「おお〜！」

今の勇者の気分は、どうやら大将みたいです。勇者達は、館の中に入ったのでした

「貴様が来る事は解っていた・・・！待ちかねたぞ！」

「はい？初対面なのに、なんで知ってるんだ？」

「我は術者なり！勇者！尋常に勝負致せ！」

「人の話聞けて」

術者は、持っていた杖を構えると、呪文らしき言葉を言うのでした。

「いくぞ！ドラム〜ベース〜バイオリン！」

これまた変な呪文ですね〜

「何？その呪文・・・」

勇者もそう思っているのです。

「た、助けて下さい！勇者様」

今の呪文で、僧侶が地面に吸い込まれました。

「あんな変な呪文でかかったの！はあ！？」

勇者も正直に驚いてます、まあ無理もありませんね？

「勇者様」！

僧侶は、地面に飲まれてしまいました。

「どうだ！私の呪文！転送魔法は！」

「転送魔法？……って言うよりただの落とし穴じゃ……」

「勇者様、魔法には魔法です」はあ……！

魔法使いは、ふところから杖を取り出して、呪文を言いました。

「あめあめふれふれかあさんが、エターナルアクアブルー！」  
またまた変な呪文が出てきましたね

「前の言葉と後ろの言葉が全然違ってるじゃんか……」

魔法使いは呪文を使いました。

「な、何だ？」

術者の足元に、水が湧き出し、一気に上昇しました。

「うわああああ！地球は青かったああああ！」

やられ台詞としては全然あっていないですね？術者は、お空の彼方に消えたのでした。

「何とか終わったな……って僧侶は！？」

勇者は、僧侶の埋まった場所を見ってみました、すると……

「うつきゆう……」

良く見てみると、かなり浅い落とし穴？に落ちていて、目を回していたのでした。

「……やっぱり落とし穴じゃん……」

勇者はそう思ったのでした。

こうして町長の依頼は、無事？終わったのでした・・・

### 第三章 がある町の出来事 (後書き)

術者弱！ W感想くれるとうれしいです。

## 〜第四章〜魔王のお話〜

ここは、暗闇にそびえたつ何処かのお城

この場所に魔王と呼ばれる奴がいるのでした・・・

「ふふふ・・・我の力も相当、強くなりおったな」

「魔王様の復活だ〜世界は魔王様の物〜そして私はその部下〜」

魔王の部下？らしき者が、変な歌を歌っています

「ちよい待て・・・一言言いたい事がある・・・」

「何でしょうか？魔王様？」

「歌いながらその変な踊りをやって壁とかを破壊するな！」

「はい？」

うんうん魔王の言っている事も解るような気もしますよ？

だって、手下ったら奇妙なダンスをしながら壁とかにキックとかぶちかましてるんですから〜

「すみません〜はしやぎすぎました〜」

「もういい・・・ん？」

魔王はみしつと言つ音を聞いて、嫌な予感がしました

「ま、魔王様……」

「何だ……」

「やつちやいました……てへ」

そう言った途端、壁が崩れ城が崩壊していくのが解つたのでした  
この城……ぼろすぎ

魔王の城なのに蹴りだけで壊れるなんて、耐久力弱いですね

「きつさつま……!!」

こうして魔王は、城とともに埋まって倒されたのでした ちゃんち  
やん

「まだ死んでないわ!」

む?しぶといですね

まあそれが魔王ですからね

やっぱりゴキブリ並の生命力と言つた所でしょうか?

「ゴキブリと一緒にするなああああ!」

はいはい魔王の話はここまでにして、勇者達の話に戻りますか〜

「無視するのでは無いいい〜!」

ところかわって勇者達は、川に辿り着いたのでした

「あ、川ですよ〜勇者様〜」

「そうだな・・・でもこの川・・・」

「何です?勇者様?」

「何故・・・茶色いんだ・・・」

勇者が不思議がるのも無理がありませんでした  
何故なら川の水が茶色に染まっていたからです  
はっきり言って超常現象ですね〜

「何だと思う?これって?」

「う〜んそうですね〜」

魔法使いは、考えました

(もしかして、誰かが大量の土を、川に投げ捨てて楽しんでいるのか

な？)

はい？第一そんな変な人いませんって

「私の考えを言いますと・・・」

いや言わなくていいです、それは絶対にありえませんが

「私も考えますね」

僧侶も考えたのでした

(もしかして誰かが悪と戦って勝利して、その敵を川に投げたら液体が・・・)

ってそんなわけ無いわ〜じゃあ何だろ？やっぱりう・・・)

それは言わない方が身の為です、はい

「ともかくこの水は危険だ、何とかしないと！」

「そうですね〜なんか気分悪くなりますし」

勇者達は、この異常な原因を調べる事にするのでした・・・  
川のはじを歩いていると、一軒の家から茶色い水が流れているのが  
解りました

勇者達は、原因を調べるべく家の中に突入しました

「おい！おまえらか！この川を異常にしてるのは！」

勇者は叫びました、するとその声に驚いて声をあげました

「な・・・貴様は勇者達か！」

こいつは何者？とかつつこみたい所ですが、正体解ってます  
魔王の手下でした

「お前・・・その格好・・・」

「あきらかに変ですよね・・・」

「私もそう思います・・・」

ナ勇者達は驚いたのでした、まあ無理もありませんね  
だって普通の服に無理矢理背中に羽らしき物がついてるんですから  
色が白かったら天使に見えるけど、黒いから悪魔に近いですね

「お前・・・人間じゃ無いな・・・？」

「言つとくが一言も人間と名乗ってないんだが・・・」

「貴方は魔王に仕える悪ですね！そうに決まっています！成敗いたし

ます！」

「勝手に言ってくれちゃって・・・まああってるからいいか・・・魔王様に怒られてこの場所へ配置されたが・・・勇者が来るとは好都合！勝負！」

あの～・・・魔王を怒らしたのは貴方じゃないんですか？

「望む所だ！」

勇者も何故かやる気になってます  
弱いくせにですね～

「いでよ！我が分身、エメラルドブレード！」

手下は何かを出現させてます、もしかしてかつこいい  
武器とか出るのでしょうかね？

「一体・・・何が出るんだ・・・」

勇者も出現する物に興味があるみたいです

「これが！エメラルドブレードだあ！」

しかし出たのは、ただの普通の筈でした  
かなり期待はずれです



く第四章く魔王のお話く（後書き）

魔王やっと登場って感じですが  
でも、城ぼろすぎですね・・・

## 第五章 賢者との出会い

勇者達は、旅を続けています。

何で旅をしているかって？それはですね？

この三人は家の者にやっかいはらいされたんですよ（笑）

「違うわあ！！！」

まあまあ事実ですし？魔王を倒しに行行って命令されたんでしょ？  
だったらちゃんとやる事をやる！

「く・・・！」

「勇者様・・・いちいち態度を見せなくても・・・」

「そうですねよ、戦闘の辛さを知らない人物ですから相手にしないでいいです」

む？私だつて一応この話のメインなんですからもちろん参加していただきますって

まあそれはさておき、勇者達は一人の人物に出くわしたのです  
その物は装備品からして僧侶よりランクの高い賢者に見えます

「もし・・・お前達は、もしかして勇者パーティか？」

「何で名乗ってもいないのに解ったんだ？ってあれ？これ何か前にもあったような・・・？」

「ほら・・・ここに書かれてある」

「や、やっぱり！」

勇者の服の胸にネームプレートが付けられていて、勇者と書かれてあるのです、服をくれたのは父親です

「あのくそ親父！」

おや？前と台詞も一緒ですねやっぱり勇者は単純だ

「まあ私達は、勇者のパーティーですけど何か用ですか？」

「私は、賢者と言う、そこでだ、一つ頼みたい事があるのだが・・・」

勇者はそれを聞いて嫌な予感がするのです

「もしかして・・・それって何かを退治するとかそういう奴？」

「まあそうなんだが・・・頼まれてくれるね？」

「嫌です」

「おや？即答ですか？勇者のくせに人助けしないと？なんて極悪非道なのでしょーうねー？」

「そうですねー何ですか？勇者様」

「だって嫌な予感がするから・・・」

「勇者様！これは正義を愛する者にとってイベント見たいなものですよ！これは引き受けるべきです！」

僧侶は、目を輝かせて言うのでした

勇者は、かなり嫌がっていましたけど

結局、賢者の頼み事を引き受ける事にしたのでした

「実はな？この先にあるお城に一緒に行ってほしいのだ？」

「どうしてですか？」

「まあそれは一緒に行ったら解る、さあ行くぞ」

勇者達は不思議に思いながらも、賢者と一緒にお城に行く事にしたのでした

「あの……」

「ん？どうしたか？」

「これ……何ですか……」

勇者達は、お城に着いた後、中に入り広い部屋へと案内されたのでした

そして服を持たされたのでした

「これに着替えると……？」

「そうだが？不服か？」

「当たり前だ！こんな恥ずかしい格好出来るか！」

「ふ……」

賢者は、いきなり勇者に飛び掛り、一瞬の間に服を着替えさせたのでした、まさに神業的です

「あ？っておい！服返せ！」

「返して欲しくば、一緒にやるのだ!」

「は?」

「さあ来い!」

「おい手を掴むな引きずるな、袖を引っ張るな!」

勇者は賢者に連れてかれたのでした  
その頃、魔法使いと僧侶はと言うと

「いらつしゃいませ!只今から、素敵なショーの始まりですよ!」

「期待度アップで興奮間違いなし!寄ってって下さい!」

魔法使いと僧侶は、何故かお城の門の所に立たされていて  
渡された紙の内容を大きく読めと言われて、読んでいたのでした

「ねえ……何で私達、こんな事してるの……」

「そうですね……これって唯の勧誘員見たいな感じじゃないです  
か……」

感じじゃ無いです、完全に勧誘員ですね  
ほらほらお客さんも集まってますし  
これはサーカスと同じなのかも知れないですね

「まあいいか・・・勇者様がいませんと、旅を続ける意味ないです  
し」

「そうだね、勇者様が帰って来るまで、勧誘してますか」

魔法使いと僧侶は、勧誘を続ける事にしたのでした  
一方その頃勇者はと言つと

「助けて~~~~!!!!」

勇者はピンチになって逃げ回ってます  
何故かと言つと、猛獣が勇者の事を追いかけているからでした

「さあ！勇者、その試練を乗り越えてここまで来て見なさい！」

「無理！て言うかてめえ、何で安全な場所にくつろいでんだ!!」

勇者は逃げ回りながら賢者に文句言っています  
文句言っていないで戦えよとか言いたいです、はい

「こつなれば剣で応戦だ！」

勇者は、剣を構えようと思いました

「あ……？」

勇者はある事に気がつきました、それは  
剣が何処かに消えてたのです、さあ何故でしょうね？

「あ、そうそう君のおんぼろの剣なら私が預かってるから、素手で  
その猛獣を倒してな」

「てめえ、涼しい顔をして、飲み物飲みながらさわやかに言いや  
がって！」

さあ勇者、これは素手で倒すしか無いですよ？  
頑張ってね

「無理無理！素手で倒せるか！こんな猛獣！」

え？勇者なのに倒せないのですか？

「これに勇者は関係ない……！」

そしてどうなったのかと言うと？

勇者はあっけなくやられ瀕死の状態になってしまいました  
まあ無理もありませんね？なんせ弱い勇者だし？  
こうなる事は解ってましたから

「さて……私の出番だな……」

さっきまで涼しそうに飲み物を飲んでいた賢者が立ち上がりました

「はあ！ミラクルメデイカルライフ！」

また変な呪文が出ましたな

勇者は、その魔法を受けて完全回復したのでした

「あ……？」

「いかがでしたか？我々のシヨールは？」

最初からずっと光景を見ていた観客達は、拍手喝采になったのでした

「もしかして……俺、やられ役かよ……」

勇者は傷ついたのでした

シヨールは無事？に終わったのでした

勇者は、賢者にぶちかまそうとしましたが、逃げられて悔しい思いをしたのであった……

## 第五章↳賢者との出会い↳(後書き)

謎の賢者登場、かなり性格がまがっています

## 第六章 敵との遭遇

勇者達は、しぶとく旅を続けてます。こいつら・・・本当に魔王を倒せるのでしょうか？

まあ、伝説の勇者と名乗ってる訳ですから魔王を倒さないとね？

「てめえ・・・誰がしぶとくだった？」

いやいや気にしないで下さいよ。そんな訳で、旅を続けています。しばらく経つと広い平原にできました

「勇者様、草原らしいですよ？」

「本当だな・・・」

「あ、あそこになんか見えますよ？」

僧侶は何かを見つけて指差しました。

勇者はその方向を見ると、あきらかに敵？と思わせる怪物がいたのでした。

「どうします？勇者様、あれはどう見たって敵ですよ？倒します？正義の勇者パーティですし？」

僧侶は倒す気満々で言っています。かなりやる気みたいです。

「そうね・・・あれって一応敵みたいですよ？倒した方が良くかも知れませんか？」

「そつだな・・・倒すか！」

勇者は、覚悟を決めて言いました。  
まあ覚悟を決めたって弱い事にはかわりないんですけどね？  
勇者達は、敵に突っ込みました。

「む？貴様らは・・・勇者か？」

敵？と思われる怪物は、大きな声をあげて言いました。

「はい？まだ名乗ってないけど・・・」

「そこに書かれてあるだろ」

怪物？は、勇者の胸の辺りを指差しました  
またまた同じパターンですね？

「・・・やっぱりこれのせいか・・・」

「勇者達だな？」

「そつだ・・・」

「我の名は、セバン、魔王様に仕える者だ！」

「やっぱり敵だったのね」

「勇者様！やはり敵でしたよ！敵と言えば悪、そう悪です！早速倒しましょー！」

僧侶は、相変わらず、やる気満々です。

「我を倒すなどと戯言を呟いて、私の事を倒せると思っているのか？」

「いや・・・そんな自信たっぷり言わなくても・・・」

「行くぞ！」

セバンは、装備していた斧を持ち、振りかざしました。

「えらく物騒な武器を持つてるな・・・ならば！」

勇者は剣を構えようとしました、そしてある事に気がつきます。それは・・・剣がぼろぼろだと言う事でした

「あ・・・」

「覚悟！流星十字斬動剣！」

はい？敵のくせに豪華な技の名前を言っています、こんなくさい台

詞を言うのは、勇者ですよね？

「うわ！剣ぼろぼろだ・・・ってうわ！」

勇者は剣で、立ち向かいました。

ただどおんぼろの剣、どうみたって勝ち目はありません  
簡単にはじき返されたのでした

「あ～～剣が～～～！」

「どうやらそんな、なまくら剣しか持っていないようだな！」

「くそ！もうちょっとマシな武器をよこせ〜！」

勇者は、これをくれた父親を怨みました。

まあ怨んだって何も変わらないのですけどね？

「勇者様、ここは私に任せて下さい！」

魔法使いは、杖を取り出して呪文を言いました。

「風の力よ、天候に問わず私に力を貸して！ブレスファイヤー！」

はい？最初の台詞と後の台詞が合っていないです。それにファイヤ

「って言ってるし？炎ですか？」

「ぐわああ！！メロンパンは甘いのが微妙だった~~~~~！！」

またまた変なやられ台詞を言って、消滅したのでした。

「何とか終わったな」

「そうですね〜でも・・・」

僧侶は、ある事に気がつきました。それは・・・

「勇者様、草原が火事になってます~~~~~！！」

「え？」

そうなんです、さっきの魔法を使って、辺りの草原に火がついたのです。

「早く！消化をと言っか、こっちまでやられる寸前じゃないか！」

「あめあめふれふれかあさんが エターナルアクアブルー！」

魔法使いの呪文で、何とか草原の火事は鎮火したのでした。

こうして勇者達は、何事も無かった振りをして、その場から立ち去

ったのでした

## 第六章↳敵との遭遇（後書き）

敵と遭遇、しかし勇者は役に立ちませんでした。  
活躍あるのでしょうか？w

## 第七章　悪魔の災難のお話

勇者達が、のんきに旅を続けている一方。

魔王の城では、壊れたので復旧作業をしていたのでした。

「む・・・何故我の城を自分で治さなければいけないのだ・・・ま  
つたくあの手下め！今度会ったら八つ裂きにしてやる！」

「魔王様、その事でお話があります」

「何だ？申してみよ」

「その手下ですが、勇者達に会って死にましたよ？」

「は？」

魔王は驚きました、まあ無理もありませんね？嫌がらせて地方に飛ばしたのが二度と帰って来なくなっただからです。

「それで・・・あいつは何と言っていた？」

「それがですね・・・空の彼方に・・・つまりお星様になったみたいです」

「はあ〜？」

魔王は、またまた驚きました。

「あのやろつゝ！城を壊しておいて罰としてあそこに飛ばしたのに、それがお星様になったただあゝ？」

魔王はかなり怒っています。

まあ仕方ありませんね

原因は、魔王にあるのですから

「それですね、勇者と名乗る御一行は、のん気に旅を続けている  
見たいです」

「なら！お前がその勇者と名乗る輩を止めて見せよ！」

「えゝゝゝ嫌ですよ、まだ死にたくありませんし？」

おいおい上司の命令を無視して自分勝手に言ってますよ？これが昔  
なら切腹物ですねゝ

「そうかゝ死にたくないかゝってこら！、お前は私の部下だろう！  
私の命令は絶対の筈だ！さっさと行きやがれ！」

魔王は、無理矢理魔法で、勇者が居ると思われる所へすつとばしました。

「魔王様〜〜あんまりです〜〜」

悪魔の叫びも空しく、飛ばされたのでした  
一方その頃、勇者メンバーはと言つと？

「ここつて凄いなあ〜！」

「ええ！そうですね〜」

「かなり楽しいです〜〜！」

勇者達は、町にいて、その町で行われているショーを鑑賞中でした。  
おい！勇者何だからさっさと魔王退治に行けよこら！とか言いたいです、はい

「いやいや本当に楽しいね〜」

聞けよ！人の話を！

勇者達は、ショーに夢中みたいです。

そんな時上空から何かが降ってくるのでした

「ねえ勇者様・・・」

「何？」

「上から何か降って来るんですけど・・・」

勇者はそれを聞いて上を振り向きました。

すると空から悪魔が叫び声を挙げて降りて来ます。

その光景は余りにもかっこ悪く見えたのでした。

「うわ！・・・って何だこいつ・・・」

「勇者様、空から降って来るとは、人間では無いですね」

見りゃ解るでしょ？どう見たって人間じゃ無いです

「ああ、無理矢理かよ・・・ってもしかして勇者達か？」

空から降って来た悪魔は、勇者達を見て言いました。

「そうだけど・・・こんな町中に出てバカじゃないのか？」

「俺がここに来たい訳じゃ無かったんだ！魔王様が無理矢理・・・」

「お前も苦勞してんだな・・・」

おいおい勇者が悪魔に同情するなよ……

「まあ来たからには勇者！覚悟！」

悪魔は、いきなり勇者達に攻撃を開始するのです。

僧侶「勇者様、戦いましょう！こうなればやってやります！」

僧侶は、何故か気合を溜めてます、何か必殺技でも出すのでしょうか？

僧侶って回復技とかメインなのに何故でしょうね？

「はあ！熱血爆砕拳！」

えらくかつこいい名前の技を言っています

僧侶は、空中にジャンプをして回転しながらパンチを繰り返しました。

「ぐほ！何なんだこいつは！」

「確かに……」

勇者もそう思っているのです。

「今度は私の番よ！はあ~~~~！！」

おいおい魔法使いまで気合を溜めています  
何故でしょうね〜

「火の力よ！閃光に稲妻よ！これを食らいなさい！エレメンタルバード！！」

はい？かつこいい台詞を言った割には、バードって・・・  
魔法使いは、杖から火と稲妻と風を出しました。  
えらく豪華ですね〜

「こいつも変だ~~~~！！」

悪魔は、魔法使いの攻撃をもろに食らって、吹っ飛ばされました。

「うわあ！オムライスにケチャップかける人とマヨネーズかける人がいた~~~~！！」

またまた変なやられ台詞ですね〜

悪魔は、それを言った後何処かに吹っ飛んで行ったのでした。

「終わった・・・さて！ショーの続きでも見るか〜」

勇者達は、とりあえずショーを楽しむ事にしたのでした

ところで・・・勇者・・・貴方、まともに戦っていないような気がするのは、気のせいなのでしょうか・・・

第七章　悪魔の災難のお話（後書き）

悪魔が災難ですね、何もしていないのに吹っ飛ばされます。

## 第八章 変な村のお話

さてさて、勇者達は村に着きました。何で村に着いたかって？それはですな〜

たまたま旅をしていたら、偶然見つけたから寄る事にしたみたいですね。

ちなみにこの村の名前って何とか村って言うらしいですよ？

「何とか村？変な名前だな・・・」

勇者に言われたか無いと思いますよ？だって名前が勇者だし？

「まあまあ中に入れてみましょうよ」

「そうですよ！何か魔王の情報が聞き出せるかも知れませんか？」

勇者達は、とりあえず村の中に入る事にしました

村に入ると、ちょうど祭りをやっているらしく村人達が踊っていたのでした。

「勇者様？何か楽しそうに踊っていますけど・・・」

「けど・・・？」

「中心に崇めている物がちょっと・・・」

「え？」

ナレ「勇者は、魔法使いが言ったので、村人達が踊って困んでいる物を見て驚いたのでした。

それは何故かですって？それはですね？

何かの恐ろしい仏像に呪、と書いて奇妙なダンスをしていたからですよ。

「こ、ここは変な宗教でもやっているのか・・・」

「勇者様・・・私・・・あまり関わらない方が良いと思うんですけど」

僧侶の言った事もごもつともです、だってこんな怪しい村人達がいるんですからね？

どうします勇者様？話し掛ける勇氣ありますか？

「そんなのは・・・無いわあー!!」

ですよ〜所詮勇者ですし？  
そんな勇気あるわけありませんよね。

「む？貴様等は？旅人か？」

あ、見つかったしまいましたよ？どうします？勇者様？

「ええ、そうですよ〜」

「ならば・・・今の儀式を見たな？」

「見てないです！見てないです！見てないです！儀式って何の事ですか！？俺はそういうのに全然関係ありませんから！」

お？何故そこまで否定するのでしょうか？一部始終を見たって言うのにですね？

「え？勇者様？見ましたのに？」

「見てない見てない！嘘をつくなあ！」

嘘をついているのは勇者の方ですよ？

いくら関わりたくないからって、見なかったふりをするなんて・・・

勇者のかざかみにもおけませんな？

「何とでも言え〜〜！」

「でも、見られたからには・・・」

「ま、まさか・・・」

勇者は、身の危険を感じました

まあ無理も無いですよね？

変な儀式を一部始終見てしまったんですから？

こうなれば死とか有り得るかも知れませんか

「見られたからには・・・儀式に付き合ってもらおう！」

「は？」

ちっ違いましたか

「おい・・・今、ちっつて言ったよな？」

いえいえ言ってますんよ？何言ってるんですか？

まあそれは置いて、村長は勇者達に儀式の手伝いをしろとか、ほざいているのでは

「何故？俺たちがその変な儀式に付き合わなければいけないんだ？」

「この儀式はな！日照りが続いているので雨を降らす儀式なのだ！お前達は、勇者のパーティーだろ？だったら人助けと思って手伝え！」

「勇者様？私達は一応正義のパーティーですから手伝いましょうよ？」

「そうですよ人助けは正義の役目、存分に助けましょう」

「……解った……でも一つ聞きたい事があるんだけど？」

「何だ？」

「その仏像に呪って書いてあるのは？すごい気になってんだけど？」

そっそっ変な仏像に呪ってあり得ないですよ

「これか？これはだな？お洒落だと言ったただの飾りだ、気にするな」

「は？気にするって」

勇者達は、とりあえず村人と一緒に雨乞いの儀式をする事にしたのでした。

しばらく経つと、雨雲が見え始め雨が降りそうになったのでした。

「お？これなら降るな！」

村人は喜びの顔を浮かべてます、しかし不幸な出来事が村を襲ったのでした。

それは・・・雨が降ったのは良いんですけど、余りに効きすぎて雷が落ちて、村が全滅しちゃったんです。

「あ・・・」

「これは・・・雨乞いしたって村が無くなっちゃえば意味が無いですよね・・・」

まったく持ってそのとおりですね

やっぱり仏像の呪いのせいでしょうかね？

「そつに決まってるだろつが~~~~!!!!」

勇者は、無駄な踊りをした事を後悔しているのですた・・・

〜第八章〜変な村のお話〜（後書き）

変な村の登場、お約束な展開？な感じですよ

く第九章く謎の少女のお話く

さてさて勇者達は、何所まで進んだのかと言うと？  
山に来ていたのでした、その山は木が生い茂り雑草がぼーぼーと、  
生えているようですよ？

「俺に言っても・・・なんて答えたらいいんだ？」

いやいや、貴方に何も言ってますし、聞いてません。

「あ、そう」

「勇者様く、山に着きましたよ？どうします？」

「そうだな・・・とりあえず・・・」

「とりあえず？」

「休むか・・・疲れたし」

「そうですね、日も暮れて来たし、休む事にしましょう」

おいおい、山の野宿は、危険がいっぱいなんですよ？  
どうするんですか？そのまま寝そべって寝てしまっんですか？

「とりあえず木の木陰で休息をとるか」

ちっ！地面に寝そべると思いましたがのに

「おい・・・またちって言わなかったか？」

気にしないでくださいよ？

勇者達は、木の木陰で休む事にしたのでした。  
そして夜になりました。

「なあ・・・」

「何です？勇者様？」

「こんな夜遅いのに、叫び声らしき声が聞こえるんだけど？」

「あ・・・本当ですね、何かいるのでしょうか？」

何かいなきゃ叫び声なんて聞こえませんか？

勇者達は、そんな声でびびってるなんてたいした事無いですね？

「おい！誰がびびってるだつて？」

まあまあそう怒らないで、平常心でいきましょつち

「あ……貴方達……」

ほら？勇者の声で、誰かに発見されちゃった見たいですよ？  
背格好からにして少女のようです。

「ん？お前は？」

少女は、勇者達の事を見ていきなり、こう言いました。

「……ださ！何？その格好？笑える」

うんうん私もそう思いますよ？

だって勇者の格好ときたら、かなり恥ずかしい格好でもあるからね？

胸にネームプレートがついてるし？

「てめえ……いきなりやって来て言う事はそれか!？」

「まあまあ勇者様、そう怒らないで下さいよ」

「そうですよ、いきなりやって来て貴女、失礼ですよ？」

「あ……すみません……面白い格好をしていたからつい本音を……私の名前は、ケイ、一応この山の調査員なの」

「山の調査員……?」

「そう、この山の植物や動物、昆虫、そして秘密部屋、洞窟、ありとあらゆる情報を調べているのよ〜お〜っほっほっほ」

ケイと名乗る少女は、自慢気に話しました。

「それで?何でこんな夜遅くに山の中にいたんだ?」

「あ、そうだった、私……変な奴に追われてるの、貴方達、一応勇者パーティーでしょ?だから助けてくれない?どっちかといえれば、

そこに二人いる僧侶と魔法使いに退治して欲しいかな？  
この勇者、なんか使えなさそうだし？」

いい所に目がつきましたね〜そうですねよ

勇者が戦ったって負ける確立が高いですからね？

「おいこら！何で俺に言わない！と言うかお荷物か？俺は！」

はいそうですね、はっきり言って徒のリーダーです

「だってあきらかに弱そうなんだもん、剣だって何？ぼろぼろじゃない」

確かにそうですね、勇者の剣はぼろぼろになっています。

「……くそ！剣さえ新しいければ！」

そう言う問題ですかね〜？

何か全然違うような気がしますけどね？

「勇者様、このさい引き受けましょうよ？」

「そうですね、私達がサポートしますし、それに、こんな夜に女性を追いかけるのは悪党に決まっていますしね」

「一つ言っただけのことあるんだけど？」

「何ですか？」

「悪党じゃなくて、悪魔なのよ……ほら」

ケイは、何所かを指差しました  
その先には、悪魔が凄惨な形相をして、こちらに向かって来ているの  
でした

68

「あ、本当ですね」

「でしょ？」

悪魔は、勇者達の前に立ち止まって、ケイの姿を見てこう言ったの  
でした。

「てめえ！よくも！」

「あの〜一応聞いてくが、こいつに何されたんだ？」

勇者は、悪魔に聞いてみる事にしました。

「人が気持ちよく寝ている所を、調査する〜とかほざいていきなり爆破しやがったんだ！」

それだけじゃないぞ！空を飛んでいたら、いきなり槍を投げつけて来るし！こいつは危険人物だ！」

おいおい・・・悪魔より酷い奴がここにいましたよ・・・

「あら〜？そんな事しましたっけ？記憶にございませんわ〜？」

おいおい？ケイは知らない振りをしていますね？

悪魔も可哀想ですね

「おのれには優しいとか言う感情はないんか〜〜！」

悪魔は、泣き叫びながら怒っています。

「ねえ…勇者様？」

「なんだ…？？」

「これは…どっちの味方をすればいいんでしょうね…」

「そうですね…なんかどうでも良いような気がしますし…」

「そうだな…」

「ね、お願い！こいつを退治して、頼むわよ！」

「おい、そこのお前ら！この極悪非道の女を成敗するのに、手伝え  
！」

あらら～まさかこいついつ展開になるとは？

どうします？勇者様？

「どっぴするって…良し！」

お？何か思いついたみたいですよ？何でしょうね？

「こうなれば・・・見なかった事にして逃げるぞ!」

はい？出した結果が逃亡ですか？

おいおい・・・

「・・・まあ仕方がないですよ、これはどっちも加勢できませんし」

「そうですね・・・ここは見なかった事にして立ち去りましょう」

勇者達は、ケイと悪魔が言い争いをしている最中に、とっととその場から立ち去ったのでした

「あれ？あいつらがいない!」

「あ、本当だ・・・」

ナレ!!その後どうなったのかと言うと？

ケイと悪魔は、言い争いじゃらちがあかないので結局バトルして戦ったのでした

そして決着は・・・お互い戦闘力高いので決着はつかなかったので

したとみ

〜第九章〜謎の少女のお話〜（後書き）

謎の少女登場、それにしても勇者、戦ってませんねW

〈第十章〉術者の復讐のお話

勇者達は、相変わらず旅を続けています  
まったく・・・いつになったら魔王を倒すのでしょうか？

「そんなの・・・知るか！」

おや？そう言う態度は良くないですね？勇者のくせに？

「てめえ・・・」

さてさて勇者達は、旅を続けているのでした  
そんなある日、一人のまがまがしいオーラを放つ人物がいたのでした

74

「くそ・・・勇者め！私の事をぶっ飛ばして！」

そう勇者達の事を恨んでいるのは、以前、勇者達に倒された術者な  
のでした

「こうなれば！あいつらに復讐してやる！」

言っときますけどこれはあくまで見習い勇者です

「見習い勇者、術者の逆襲、」とかじゃ無いです、はい

「さて……あいつらは何所にいるかだな……って」

術者は、驚きました、何故ですかって？

それはですね？探そうと思っていた相手が、前からやって来たからですよ

(前からやってくるじゃん、どうして気が付かなかったんだ？)

それは、貴方が考えていたからでしょ？勇者達は、術者の前からやって来るのでした

「よし、丁度いい所に勇者達がやってくるな？復讐してやる！ふっふっふ」

一体どんな復讐をするのか楽しみですね？

「……なあ」

一方勇者達はと言つと？

「何ですか？勇者様？」

「なんかさあ……こっちの道で合ってるのか？」

勇者の言う事も一理ありますね、  
だって先に進んでいくと、何故か遊技場あり、町が見えるのですか  
らね？

「そうですね……」

魔法使いは、ちょっと考えた後、言いました

「合っていないかも知れませんね」

「なら意味ないだろう！」

「まあまあ勇者様、旅をしていればいつか見つかりますって」

おいおいそんな曖昧でいいのでしょうかね？

「ちょっとその貴方達」

勇者達に、話し掛けて来る者がいました

「はい？何ですか？」

(ふっふっふ、変装しているのではれてないな)

ばれて無いんじゃない？解らないんじゃない？だって魔道服じゃなくて普通の服ですからね？

「この健康茶をいらんかい？ただいま無料で配っているですよ？お一つどうですか？」

術者は、勇者達にお茶「美味！ミラクル茶」と書かれているお茶パックを勇者達に見せました  
ミラクル茶って・・・あきらかに怪しい名前のお茶ですなあ

「え？いいんですか？ありがとうございます」

おいおい即効貰っちゃったよこの人

勇者には怪しいと思う感情は無いのかな？

「勇者様が、貰うなら私も貰いますね〜」

「あ、私も貰います〜」

「ありがとうございます、早めに飲んで下さいね？ふふふ・・・」

術者は、その場からぱつと逃げ去りました

そして勇者達に気がつかれないように、後からついて来るのでした  
はつきり言ってストーカーですね〜

「五月蠅い！・・・まあこれで勇者に、あのお茶を渡したのだから  
な・・・ふふふ」

やっぱり怪しいお茶だったんですね〜毒薬ですか？

「あのお茶はな？飲むと一瞬で三途の川が見えると言う優れもの  
お茶だ、きつと今頃

飲んで倒れているに違いない！」

術者は、勇者達が何時の間にか見えなくなったので、先に進みました

「あ……あれ？」

術者が驚いたのも無理がありませんね

だって、勇者達ったら元気そうに歩いているのですからね？

「おい……あのお茶は、どうしたんだ？」

術者は、勇者達に向かって言いました

「あゝあれ？飲もうとしたら、風でお茶の葉が飛んでって、なくなっちゃったんだけど？」

なんと言う悪運強いですね  
勇者だからかな？

「くそ！失敗か……」

「で？貴方？何なんですか？」

「私か？私はだな……」

「あ、解った、商売人だ」

「はいこの商品は300Gユー  
ズですよ〜って違っ!」

「じゃあ?何屋さん?」

「何屋さんでも無いわ!私はだな・・・お前達に倒された者だ!」

術者は怒っています

まあ無理もありませんね〜

「倒された?」

「う〜ん?」

「・・・誰?」

ナどうやら三人共、覚えていないようです  
酷い人たちですねあ

「私は、術者だ！」

「術者？あゝそういえば倒したような気が」

「あ、私もそう感じます」

「敵だったら最初に言って下さいよ？解りませんって」

「みりゃ解るだろ〜！」

「いやいや普通の服ですので、見た目だけでは解りませんって」

「こつなれば術で倒してやる、勇者、覚悟！」

「術者は、何所から杖を取り出して呪文を言いました」

「勝負って・・・やだ」

「は？」

術者は、それに驚いて呪文を言うのをやめました

「どうしてだ！」

「だって・・・めんどくさいし」

「そうですね〜同じ相手ともう一回戦いたくありませんね？」

「うん、こつなれば逃げちゃいましょうか？勇者様」

「おう！」

おいおいこれが本当に正義の味方でしょうか？  
勇者達は、術者から逃げ出しました

「おいこら！待てって、あ・・・」

術者はある事に気がつきました、それは・・・  
術を途中で止めてしまったので、大きい光の玉が術者の上にあるか  
らでした

「もしかして呪文を言うのをやめたから・・・」

はいそうです、大きな光の玉は、術者に直撃したのです

「ぎゃあああ！こんな終わり方、嫌だ〜！！」

確かに嫌ですね、自滅なんて

術者は、術をもろに食らって消滅したのです

「結局・・・何だったんだ？あいつは？」

「そうですね？勇者様」

「勇者様？後ろの方に大きな光があったけど何かあったんでしょうかね？」

「さあ？まあ旅を続けるとするか」

勇者達は、何事も無く旅を続ける事にしたのでした

く第十章く術者の復讐のお話く（後書き）

勇者たちひどw

結局術者は何をしたらよかったんでしょうかね？

〜第十一章〜天使と悪魔のお話〜

勇者達は、まだまだ旅を続けています。

本当に魔王の所まで辿り着けるのでしょうか？  
心配になってきましたね？

「何も心配する必要は無い！何とかなる！」

おいおいそんないい加減でいいのでしょうか？  
まあ今のは置いといて、勇者達は湖に來ていました。

「勇者様〜綺麗な湖ですね〜」

「本当です〜澄んだ水でとっても綺麗です〜」

「本当だ〜〜」

勇者達はうかれています

さっさと退治しにいけよとか思いますね。

「ち〜て遊ぶぞ〜!」

勇者は、真つ先に湖に向かって走り出しました  
まるで子供のようにですね

「あ、勇者様へ待って下さいよ〜」

「わ〜い、私も遊びます〜」

おいおい魔王を倒すという使命はどうしたんだ？  
勇者達は、湖に飛びこもうとしました。

「ちょっと待て！」

いきなり何所からか声がしました  
勇者達は、声のする方を振り向くと、背中に  
白い羽が生えている、RPGとかに出てくる天使その物でした。

「あ……貴方は？」

「凄い……浮いています……」

「あ、本当だ・・・」

勇者達が驚くのも無理がありませんでした。だって、湖の上に浮かんでいるのですからね

「私は、この湖を守っている天使だ・・・この湖に何の用だ？」

天使は、何かえらく物騒な武器を構えて言っています。はっきり言って怖いです、はい

「え？俺達は、ただ気持ちよさそうだったら入ろうかと思ったただけだよな？」

「え？ええそうですよ？」

「この湖にはいるだと？正気か？」

天使は、勇者の言葉を聞いて啞然としました。何故でしょうね？

「この湖はだな、入った者を一瞬で水に分解してしまう恐ろしい湖だ！湖の名前は「一瞬湖」一瞬で水になってしまっからそう名づけられたのだ」

それは恐ろしい湖ですね。

「その話・・・本当ですか？」

「確かに・・・そんな物騒な湖の名前、今、初めて聞きました・・・」

「そう言う嘘を言って、独り占めしてるだけじゃないか？」

おいおい天使の言葉を疑ってるよ  
疑りぶかい人達ですね。

「まあ疑うのなら構わない、だがな？あやまって落ちたって、私は責任取らんぞ？」

天使は、そう言った後、湖に消えたのでした

「何だよ・・・天使が湖に入れるって事は、やっぱり嘘なんじゃない」

「そうかも知れませんか？」

「じゃあ入ります？湖に？」

「うん・・・どうするかだな」

勇者は、考えました。

するとそこに一匹の兔が、湖に落ちたのが見えました。

「あ、兔が・・・」

勇者は驚きました、何故ですか？

それはですね？兔が一瞬で水に入った瞬間、消滅したからですよ。  
天使の言っていた事は、嘘じゃ無かったみたいです

「どうしました？勇者様？」

「やっぱりこの湖、危険！やめといた方がいい！」

「ゆ、勇者様？何でそこまで熱く語っているのですか？」

勇者達は、結局、湖に入る事はやめたのでした  
ちっ！入ると思ったのにですね

「何か言ったか！」

「いえいえ何も言ってますんって？」

「勇者達は湖から立ち去ろうと決めたのでした」

「む？お前ら・・・もしかして勇者か？」

「あら？またまた誰かやって来たみたいですよ？」

「背格好からして、悪魔に間違いありませんね。悪魔って解りやすいし？」

「げ・・・」

「げって言っちゃいけませんね？」

「一応勇者なんですからね？」

「勇者様、また悪魔ですよ？」

「やっぱり悪魔は魔王の手下と決まっていますから、倒しましょう」  
「！」

「はあ？倒すだって？俺を倒せると思っているのか？」

悪魔って・・・同じような台詞ばっかですね？  
他に台詞とか無いんでしょうかね？

「まあ結局倒すしか無いのなら・・・倒すか・・・」

勇者はやる気無さそうですね。  
こら！しっかりせんかい！

「ふははは！俺はな？魔王様から特別に武器を頂いたのだ！勇者、  
覚悟！」

悪魔は、銃見たいなのをつて・・・まるきつり銃じゃん・・・  
ちなみに名前は「連射式スペシャル散弾銃」とか言っらしいです。

「と、飛び道具！？」

「食らえ！勇者！」

悪魔は、、目標を勇者に絞って  
勇者目掛けて発砲しました

「うわ！マジ死ぬ！てか飛び道具反則！」

「ゆ、勇者様、弾の弾道を見切れれば避けられます！」

「むちゃ言うな！そんな俺は達人じゃあない！」

とか言いながら全ての弾をギリギリで避けています。

おいおい・・・達人の領域まで入ってるじゃないですか！？

「何？なんで避けられるんだ！？」

「俺にも解らないいい！」

これが危険を感じると体が勝手に動くと言う物なんじゃないかな？

「今度はこっちの番です！」

魔法使いは、杖を手に持ち、呪文を言いました

「口笛はなぜ顔をひそめるの？歌声は何故私を待ってるの？教えて！エレメンタルボイス！」

はい？またまた変な呪文が出ましたな  
杖から超音波見たいな波動が、悪魔に襲い掛かりました。

「何だ！？この感じは！アルプスを思い出す・・・！」

悪魔はアルプスに行った事あるのでしょうか？無いと思いますがどね？

「トドメを刺します！はあ！」

僧侶は、気合を溜めました。

「はあ！爆砕烈火拳！」

は？貴方は僧侶ですよ？解ってますか？僧侶は、力を込めて相手の急所と思われる場所にパンチを、叩き込んだのでした。

「ぐふ！何だこいつは！」

悪魔は、吹っ飛んで、湖の方に飛んで行ったのでした。

「あ？あっちの方は・・・確か湖がある所だな」

「そうですね」

「湖に落ちたらどうなるのでしょうか？あの悪魔」

さあ？？やっぱり消滅するのでは無いかと思いますけどね？

「ぐは！な、何だこれ！ってうわあ！」

言った通りになったみたいですね？

悪魔は、ゴルフのホールインワン見たく、すっぱりと湖に落ちたみたいですよ

「あ、本当だ」

勇者達は、湖に落ちた悪魔を見ているのでした。

すぐに悪魔は一瞬で消滅して、元の湖に戻ったのでした

「だから言ったんだ・・・この湖は恐ろしいってな・・・」

天使は、落ちた悪魔を見て、そう呟いたのでした。

「さって、こんな危険な湖からさっさとオサラバするか」

「はい、そうした方がいいですね」

「さあさあ気を取り直して、行きましようか？勇者様」

勇者達は、旅に戻る事にしたのでした・・・

〈第十一章〉天使と悪魔のお話 〈後書き〉

悪魔、災難です W

しかし、本当に戦ってないなあ、勇者 W

〈第十二章〉二人の悪魔のお話

さてさて、この物語、かなり続きますね〜うれしい限りです。まあ勇者が魔王を倒せるのかどうか別としてですがね？

「てめえ・・・言いたい事はそれだけか？」

「勇者様、怒らないで、平常心でいてください」

「そうですね、この先に見えるのを見て、落ち着いて下さいよ？」

僧侶は、前を指差しました

指差した方向を見ると、一本道に谷があって、一本の橋があったのでした

「これ・・・渡るのか？」

「当たり前ですよ？そうじゃないと先に進まないですから？」

「あ、やっぱり？」

勇者は、嫌そうですね。まあ所詮勇者だし？怖がりなんでしょうw

「何か言ったか？」

いえいえ何も言ってませんよ？

「勇者様！渡って見ましようよ？ここにいても何も始まりませんか  
らー！」

僧侶は、渡る気マンマンで言ってますね

彼女には橋が渡る途中に崩れたらって考えないのでしょいかね？

「・・・まあいいか、渡ったって別に橋が壊れる訳無いしな・・・」

勇者達は結局、渡る事にしました

最初からそうしろよ・・・とか思っちゃいましたね

一方その頃

勇者達の事を発見した者達がいるのでした

「む？おい！あそこにいるのって・・・もしかして勇者達か？」

そうそれは、たまたま飛行中だった悪魔達なのでした

「もしかしてじゃなくて、あれは思いっきり勇者達であるっつ…」

悪魔達は思いました、これは良いチャンスだっつ

まあこの悪魔達に何が出来るかは解りませんがね？

「奴等は、橋を渡るのか・・・よし！渡りきる前に倒してやるわ！  
フハハハ」

悪魔と言っても二人いるので、悪魔1と名づける事にしましょう  
悪魔1はうすきみ悪く笑いました、見事な悪役っぷりですね

「まあ待て、いい考えがある・・・」

悪魔・・・さっき話したのと別の者なので悪魔2と名づけましょう  
悪魔2は、何かを思いついたらしく悪魔1に何やら話す見たいでした  
「まずこの橋の勇者達が渡りきる・・・つまりゴール地点に着いて  
だな？勇者達が到着する前に橋を切り落とすってのはどうだ？いい  
考えだろ？」

そんな考え、悪役の人なら誰だっつて解ると思いますけどね？

「おお！それはいい考えだな！早速実行しよう！」

おいおい・・・マジでこの作戦成功すると思ってるよ・・・  
悪魔達は、この考えついた物を「切り落とせ！悪魔の橋作戦！」と  
名づけ早速現場に向かったのです・・・

「勇者様へ早く渡って下さいよ」

「そうですねよ、こっちは待ってるの退屈なんですから」

「お前ら！ちょっとは怖がりとかしろよ、なあ！」

勇者の言ってる事も解る気もしますけどね？

だって落ちたら二度と助からないような感じだし、橋がぼろぼろで  
すもんね

魔法使いと僧侶は、走ってもう渡りきっちゃった見たいですけど

「うう・・・何で俺がこんな目に・・・ってうわー！」

勇者は、足を踏み入れた所が落ちたので恐怖を感じたのでした

「あ、あぶねえ・・・落ちる所だった」

そのまま落ちても別に良かったんですけどね？

「おい？また何か言ったよな？」

いえいえ気にしないでください

勇者は、無事？に渡りきったのでした

「さつて！、先を急ぐぞ！」

「解りました」

「了解しました、どんどん行きましょう」

勇者達は、そのまま先を進む事にしたのでした  
一方、悪魔達と言うと

「はっはっはかかったな！勇者め！これで最後だ！」

「そつだ！私達にかかればお前ごとき！簡単に倒せるわ！」

悪魔達は、橋に向かって大声で叫んでいるのですた  
しかし誰もいません、まったく徒のあほな人達に見えますね

「つて……いないじゃないか！」

「あ……？確かに、さっきまでいたのに……すれ違ったか？」

はい、すれ違いました

悪魔達が飛行中、黙々と歩いている勇者達がいたのですけどどうやら別人と思つたらしく、そのまま通り過ぎたようです  
やっぱりマヌケですね

「くそ！私達は畏に引つかつたのか……」

いやいや畏に引つ掛かつてませんって、徒の遅刻ですよ

悪魔達は相談し、次こそは勇者達をやつつける事に決めたのでした・

・  
・

〜第十二章〜二人の悪魔のお話〜（後書き）

悪魔・・・あほですねw

この物語はまだまだ続きます

〈第十三章〉二人の悪魔のお話の続きの話

さてさて、前回悪魔達は勇者達撲滅作戦？に失敗したのです。まあ、成功しないとは解ってましたけどね？

「おい・・・言いたい事はそれだけか？」

「我々の作戦は、たまたま失敗しただけだ・・・次こそは勇者達に引導を渡してくれる！」

そんなの事言つて、大丈夫なんでしょうかね？  
また、失敗するような感じもしますけどね？

「次の作戦は、こうだ！」

悪魔2は、何かを思い出したらしく、悪魔1に言うのでした

「まずな・・・勇者達には二人の用心棒らしき人物が居る、そいつらを何とかしないと、こちらに勝機が無いような感じなのだが？」

「確かに・・・勇者と言えど、弱そうな感じだったからな・・・」

弱そうな感じじゃなくて、はっきり言つて弱いんです

「だからまず勇者に付いている者を引き離して、一人一人で相手にすれば勝てると思うのだ」

「それは、いい考えだな？早速実行に取り掛かる事にしよう」

悪魔達は、この作戦を「勇者の仲間はぐれ大作戦！」と名づけ、実行する事に決めたのでした  
一方、勇者達はと言うと？

「はあ……ここ……何所だ？」

勇者達の目の前には、壮絶な雪山が聳え立ち、いかにも寒そうな感じなのでした

「勇者様？ここを通るんですか？」

「どつしよつか迷っている所だ」

「勇者様、雪山って事は、魔王がいる可能性がありますよ？早速行って見まじょうよ」

おいおい……本当にいると思うのでしょうか？

「そつだな・・・まあここにいっても仕方が無いし・・・寒そうだけ  
ど行くか」

勇者はそう言いました

まあ、寒そうって言ったって何も変わらないんですけどね

「じゃあ行きましょっ」

「おお〜！」

勇者達は、結局雪山に入る事にしたのでした

「お？見つけたぞ？早速行動開始と行こうか？」

「OK、こっちは準備万端だ」

悪魔達は、勇者達を見つけたようです  
さあ、これからどうなるのでしょうかね

「勇者様・・・やっぱり寒いですね・・・」

「本当だな・・・」

勇者達は、吹雪の吹く中、歩きつづけています  
そしてしばらくしてある事に気が付きました、それは・・・

「ねえ、勇者様・・・」

「何だ？」

魔「僧侶の姿が、見えてないんですけど？&quot;と言うか、はぐれてしま  
った見たいなんですけど？」

「は？」

は？&quot;って言っても事実です  
僧侶は、勇者達から見えないで、何所にいるか検討もつかないので  
した

はつきり言って遭難ですね

「・・・この場合、どうすればいいんだ？」

「探しますか？でもこっちが遭難する可能性がありますし・・・」

「そうだな・・・とりあえず先に進むか・・・吹雪がやんだら会えるだろう」

ナレ「おいおい見殺しですか？酷い人達ですね  
勇者達は、そのまま先を進む事にしたのでした  
一方、僧侶はと言うと

「勇者様々？何所ですか？」

僧侶は、大きな声で叫んでいます  
まあ、叫んだって吹雪の中じゃ聞こえる筈無いんですけどね？

「ぐっはっはっは！見つけたぞ！勇者の一味だな？」

「お、お前は！」

僧侶は、ある者に出くわしました  
それは・・・

「我は、魔王様に仕える悪魔なり！勇者の仲間と見た！勝負！」

悪魔1は、僧侶に向かって言いました

「魔王の手下……って事は悪ね？この私！僧侶に向かって勝負と言いましたね？」

解りました！受けましょう！私は正義の使者ですから！」

え？貴方は僧侶じゃ無いんですか？

僧侶は戦う気満々で言っています

「なら！覚悟！」

悪魔1は、手から熱線を僧侶に向けて、発射しました

「はあ！つとつ！やあ！」

僧侶は、それを余裕で避けてます

あの……だから貴方は僧侶なんですけど？

そんな軽々と避けられても……

「今度は、私の番です！はあああ！」

僧侶は、気合を溜めて、打ち込みました

「はあ！流星残像拳！」

はい？また変な特技が出ましたね？

僧侶は、素早い動きで悪魔に取り付き、一点に集中して拳を打ち込んだのでした

「ぐほ！何だこいつ！」

うんうんそうですよね

僧侶なのに、まるで武闘家みたいですしね？

「とどめを食らいなさい！はあ！！」

また気合を溜めて、拳に力を入れました

「はあ！真・夢想乱舞！」  
しん・むそうらんぶ

はい？どっかで聞いた事あるような名前の技ですが？

「ぐはあ！おのれ~~~~！！！！ワシの命は永遠に〜！」

はい？変な台詞で、悪魔1は消滅したのですた

「ふう・・・悪を倒したわ・・・これで私の正義に燃える証が出来たよなものね・・・  
さて・・・勇者様を探さなくっちゃ！」

僧侶は、勇者の事を探すことにするのですた・・・

「あいつがやられたか・・・次は・・・私の番だ！」

悪魔2は、そう呟いたのでした・・・

↳第十三章↳二人の悪魔のお話の続きの話↳(後書き)

僧侶・・・強すぎですw

## 第十四章 雪山の悪魔のお話

さてさて勇者達は、今、雪山にいるのでした

猛吹雪が吹き荒れる中、黙々と前に進んでいます

まったくこんな所に、魔王なんて入る筈無いのですけどね？

「そんなの知るか！てか・・・寒い・・・」

「そうですね・・・本当に凍ってしまっような感じでもありませんよ・・・」

視界は、吹雪で全然見えなくなっており、何所に魔法使いるのか解らないのでした

「大丈夫だ・・・前に進めば何とかなる！」

そうは言ってもですね？

吹雪が吹いているのに、前なんて解るんですか？

「何とかなる！」

そんな曖昧で言いのでしょうかね？

勇者は、どんどん先を進みました

先に進んでいくと、晴れてきて、吹雪が止んでいたのです

「やった・・・この難関を突破したぞ！」

「あ、勇者様！やっと見つけましたよ」

別の場所から、僧侶が出現したのでした

「大丈夫だったか？それに一体、何所に行ってたんだ？」

「私ですか？私はですね、強大な敵と激しく戦ってたんですよ  
いや、あの時は、どうなる事かと思いましたが何とか勝ちました  
」

え？強大な敵って・・・悪魔なのになにかも、余裕でぼこぼこにして  
たじゃないですか！？」

「なんか表現に誤りがあるみたいだけど・・・まあいいか・・・」

勇者は、また何かこいつはやったんだろう・・・と思い、聞かない  
事にしたのでした

「あの～勇者様・・・一つ聞きたいんですけど？」

今度は、僧侶が勇者に質問をしました

「魔法使いの姿が、見えてないんですけど？何かあったんですか？」

「今度は魔法使いかよ！」

勇者は、そう叫ぶ

まあ叫んだって、見つかるはず無いのだけどね？

一方、魔法使いはと言うと？

「ここは・・・寒い・・・」

魔法使いは、勇者とはぐれてしまったので、雪山の中、一人で歩いていました

「一体、勇者様は何所に行ってしまったのでしょうか・・・それとも私が迷ったとか？」

魔法使いは、考えました

何故はぐれたかを・・・しかし、答えが出ませんでした

魔法使いが、悩んでいると何所からか、誰かやって来るのでした

「お？見つけたぞ！勇者の仲間だな？」

それは、悪魔2でした

「な！？貴方は悪魔？どうしてここに！」

「そんな事は、どうでもいい！勇者の仲間め・・・覚悟！」

悪魔2は、手から剣を出現させました  
まるでマジックみたいでした

「そっちがその気なら・・・こっちだつて！」

魔法使いは、杖を取り出して、呪文を言おうとしました

「甘いわ！」

悪魔2は、素早く動いて魔法使いの持っていた杖をふっ飛ばしました

「あ・・・！」

「どうだ！これで魔法は、使えまい・・・覚悟！」

「・・・・・・・・それはどうでしょうね？」

「な・・・・・・・・何？」

魔法使いは、不適な笑いを浮かべた後、呪文を言いました

「この力、神にささげよ無明の大地！（むみようのだいち）エレメンタルストーン！」

はい？魔法使いは、杖も無いのに呪文を言いました  
しかもなんか強そうな呪文をですね

「は？何故だ！何故、呪文が使える！」

「それはね？あの杖が、雰囲気を作る為の徒の飾りだったからよ！」

「はああ〜？？何だそれ〜！」

悪魔2は、驚いた顔をしました

まあ無理もありませんね

魔法使いの放った呪文は、空から石ころ？見たいなのが降ってくる  
みたいな呪文でした

「何だ・・・こんな小さい石だったら、私は倒せんぞ？」

「誰が小さいって言いました？」

そう、魔法使いが言いました

それを悪魔2が聞いて、また上を向くと、さっきより二倍大きい石が  
落っこちてくるのが解ったのでした

「え・・・？これって、隕石っぽいような・・・」

そうです、完璧隕石クラスです

大きい石は、悪魔2に直撃しました

「うぎゃあああ！あ、お星様が見える・・・」

メルヘンチックな事を言っつて、悪魔2は消滅しました

「ふう・・・なんとか終わったわ・・・さて、勇者様を探しますか・  
・・・」

魔法使いは、ちっぴかり魔法でシールドを張って、衝撃を防いでいました

半径500mは消滅したというのに、おきらくな人ですね・・・魔法使いは、歩き回って、やっと勇者達と合流する事に成功したのです

その日、雪山の地形が少し変わった事、それが地域の事が書かれてある本に  
いづれ載る事になるのです・・・

〜第十四章〜雪山の悪魔のお話〜（後書き）

魔法使いの技、すごすぎですw

〜第十五章〜危ない青年に出会ったお話〜

勇者達は、まだまだ旅を続けています  
魔王の場所も解らないと言うのに・・・  
無謀な人達ですね

「五月蠅い！何と言うと俺は、旅を続ける！」

勇者達は、洞窟がある場所に到着しました  
その場所は、異様な雰囲気を漂わせており、何か出そうな感じの場所でした

「何か凄い物がいそうな感じの場所ですよ？勇者様」

「凄い物って何だ？」

「え？え〜つと火を吹くドラゴンとか、手で大木を切り裂ける猛獣とか？」

そんな恐ろしい生物は、現代にいないと思われるのですが？  
僧侶は、自身満々で言っています

「何でもいいですけど・・・入るんですか？勇者様」

「どうしようか・・・てか、入っても意味が無いような？」

確かにそうかも知れませんが、だって勇者達は魔王を倒す為に旅をしているのですからね

「じゃあ入るのやめて、他の場所に行きましょうか？勇者様」

魔法使いがそう言った時、洞窟の中から一人の探検服を着た青年が出て来たのでした

「む？貴方達は・・・？」

その青年は、手にスコップを持ち、リュックサックを背負っていたのでした

「貴方は、ここで何してたんですか？」

「君達は・・・この財宝を探りに来た者か！」

「え？財宝……？」

「財宝……？」

「え？」

青年は、いきなり銃を構えて撃ちまくりました

「うわあ！何するんですか〜！」

勇者達は、急いで岩陰に隠れたのでした

青年は弾を全てを撃ち尽くした後、こう言ったのでした

「この宝は渡さないぞ……って、あれ、僕……何かしました？」

青年の顔つきが一瞬で変わって、穏やかな顔になったのでした

「あ……なんか大丈夫みたい……」

「怖かったです……、変な薬でもやってるのでしょうか……」

多分そうかも知れませんね

「すみません・・・僕、何かしました？」

「ええ！十分しましたよ！もう少しで殺される所でしたよ！」

「え？す、すみません・・・ちょっと感情が高ぶっちゃって・・・」

「財宝って言うてましたけど、一体どんな財宝なんですか？」

「ああ、それかい？それは、紫宝石がここに眠っているんだ」

「紫宝石？」

「それは一体何なんですか？」

「紫宝石とは、普通の宝石とは違うんだ  
優れた剣の材料に使われている物なんだ

それを僕は、集めて剣を作って貰って旅人に売っている者だ、まあ商人見たいな感じかな」

「そうなんですか・・・む？剣・・・？」

それを聞いた魔法使いと僧侶は、そつと勇者に耳打ちしました

「ねえ、勇者様、紫宝石むすしで剣を作ればいいんじゃないですか？」

「そうですね、それがあれば魔王にだって勝てる気がしますよ」

「そうだな・・・ちょっと聞いて見るか」

勇者は、青年に話し掛けました

「あの・・・俺達も一緒に搜索して良いですか？」

「む？そうだなあ、いいだろう、見つけたら半分に分けますね」

「了解！」

こうして青年と一緒に勇者達は、洞窟内に侵入したのです

洞窟内は、結構広く、外の光に照らされて少し明るかったのです

「え〜っとここを真っ直ぐ行くと・・・」

青年は、分岐点でどっちに行くか迷っていました

「真っ直ぐですね〜！」

「あ、そっちは・・・」

魔法使いは、真っ直ぐ進みました

そしてポチっと言うボタンらしき音がして、何か作動したのです

「真っ直ぐ行くと矢が飛んでくる・・・」

ビュッと音がして、矢が魔法使いの目の前を通り過ぎたのです

「だから端の道に行く・・・あれ？大丈夫でしたか？」

「初めに言っておさいよ・・・」

「おいおい・・・罨が仕掛けてあるのかよ・・・」

「罨があるって事は、お宝がある可能性高いですよ」

勇者達は、先を進み赤いボタンと青いボタンがあつて、行き止まりなのでした

「え〜つとここは、青いボタンを・・・」

「押すのね！えいつ」

僧侶は、青いボタンを押したのでした  
すると・・・ゴーと音がして、上から水が落ちて来たのでした

「青いボタンを押すと水が流れるので、赤いボタンを押すべし・・・  
ん？どうしました？」

「もっと早く言って下さいよ・・・」

僧侶は、ずぶ濡れになりながら言うのでした  
更に先を進んでいくと、広い部屋に出て、中心に宝箱がありました

「お？宝箱発見って事は、ここに紫宝石しほうせきがあるって事かな？」

「そうじゃないですか？」

勇者達は、早速宝箱を開けました

中には紫色に怪しく光る宝石、紫宝石しほうせきが入ってあったのでした

「これが紫宝石しほうせき・・・」

「これで剣が作れますね」

「よし、これを持って脱出だ・・・うぐ・・・」

青年は、急に苦しみだし、顔が変わったのでした

「ま、まさか・・・」

「おう！おめでとう！この宝は俺のもんだ！失せろ！」

青年は、再び顔を変え、凄い顔で腰に装着していた新しい銃を発砲しよつとしました

「二重人格の人は嫌だ〜〜!!!!」

「本当にそうです〜〜!!」

「きゃああ! さつさと逃げましょう!」

青年は、銃を乱射しながら追いかけて来るのでした  
そして外に出て、又、性格が戻ったのでした

「あ……れ? 又、僕、何かしました?」

「思いっきりしたんだよう!」

勇者達は、青年に怒りをぶつけ、紫宝石しほうせきを貰って旅をするのでした  
紫宝石を早速、剣に加工して、使う事にしたのでした……

く第十五章く危ない青年に出会ったお話く（後書き）

危ない青年ですねぇww

〈第十六章〉摩訶不思議な平原の話〉

さてさて、勇者は、紫宝石しほうせきを貰い、剣を作ったのでした  
それを構えて旅をしています、一方その頃・・・

「おい・・・」

ここは、何処かにあると言われる魔王が住まう場所、暗黒城  
その場所にいる魔王が何か言っているのです

「ちょっと聞きたい事があるのだが・・・」

魔王は、手下と思われる悪魔に言ったのでした

「なんですか？魔王様」

「これ・・・なんとかならんのか！」

そう言うのも納得がいきまずね

だって・・・暗黒城つたら、物凄くぼろくて、雨漏りは確実になる  
穴は空いてるし

しかも、廊下がでこぼこだらけで  
すぐ転びそうな感じじゃないですか？

「だって……、予算がありませんし……この場所って、結構不便なんですよ」

「く……これもあの勇者とか名乗る奴らのせいか……」

違うと思いますけど？

勇者は、この状況に絶対に関係無いですね

「お前！早速だが！、勇者達を倒しに行って来い！」

「え〜？何ですか？魔王様、勇者達が簡単に見つかるなら苦労は  
しませんよ〜」

「おい……もしかして、勇者達の居場所を掴めてないと申すのか  
？」

悪魔は、それを聞いてにこっと、笑うと、作り笑いでこう言いました

「はい！ぜん〜ぜん、掴めてません」

「それが笑いながら言う事がああああ!!」

魔王は、手に力を込めて、思いっきりぶっ飛ばしました

「さっさと探しに行つて来い！」

「はい、解りました」

魔王は、悪魔を空高く吹っ飛ばして、見送ったのでした・・・  
一方その頃勇者達はと言うと？

「この剣は・・・なかなか良い剣だな・・・」

「ええ、そうですね、でも・・・」

「でも、何だ？」

「この剣、紫色に光ってますよ？なんか怪しい感じがするのですけど..」

「ま、細かい事は、気にしない気にしない」

「そうですねよ、使えれば何だってありますよ」

勇者達は、そんな事を呟きながら歩いていました  
すると、広い平原に出て、川が見え始めたのでした

「む？ここは・・・」

「何か知ってるんですか？勇者様」

「いや、ここは良い風が吹いているのだなと」

「そうですね、気持ちいい風が吹いてます」

僧侶が、そう言った途端、まるで逆らうように、物凄い強風が  
勇者達を襲ったのでした

「うわ！なんでいきなりこんな強風に！？」

「知らないですよ！何かあるのでしょうかあぁ」

「風強くて、飛ばされそうですっ」

ここで、説明しよう、この場所は、言った事が反対になると言う摩訶不思議な平原なのであった

「何だよそれ・・・」

「じゃあ、言った事が反対になるとしたら、こう言えば良いんですね、ここは強風が吹いてる！」

魔法使いがそう言った途端、風がぴたりと止んで、無風になったのでした

「ふう・・・危なかった・・・」

「うかつにこれは、言葉を言っちゃいけませんね・・・」

「ああ、ちっせとじっから脱出しよっ・・・」

「あ、勇者様！それを言っちゃ！」

「え・・・あ！しまった！」

そう、さっさと脱出しようと言ったので、この平原から脱出出来なくなっただけでした

平原に薄いシールドが貼られて、まるで進む者を拒む見たいでした

「しまった！えーっと・・・」

こう言えばいいのだな！俺達はこの平原から脱出しない！」

勇者がそう言うと、薄いシールドが一瞬で消えて、元の平原に戻ったのでした

「こんな危ない平原は、さっさと脱出しないぞ！」

「はい！解りません！」

勇者達は、反対の言葉を言い合って、平原を脱出しようと思いました

「見つけたぞ！勇者達だな？」

運悪く、平原を抜ける前に、悪魔と出くわしてしまったのでした  
ついていない人達ですね

「ほっとけ！」

「お前らは、勇者達だな？」

「いえ、違います、俺達は、唯の旅人です」

「はい、そうです、私達は唯の旅人です」

「そうなんです、私達は、本当に唯の旅人なんです」

悪魔が、勇者達と言ったので、勇者達は自分達じゃないって事を言  
っているのです

「嘘をつけ！、おっとここは、そういう平原だったか、じゃあ！お  
前らは勇者達じゃないな？」

「うち、ばれたか！いかにも俺達は、勇者メンバーだ！」

別に隠してないと思われるのですけど？

「勇者達じゃないな！なら、成敗しない！」

悪魔は、勇者達に襲い掛かるのでした

「勇者様、こう言えば良いんじゃないですか？」

「何だ？」

「こうです！悪魔は、私達に攻撃する！でも、悪魔は空の彼方に吹っ飛ばされないです！」

僧侶が、そう言った途端、悪魔は、何故か自分に攻撃してそして空の彼方に吹っ飛んで行くのでした

「そんな馬鹿な〜！！！」

悪魔が、そう言うのも無理が無いですね

だって何もしいまま、空の彼方に吹っ飛んで行ったんですから

「やった！悪魔を倒してないぞ！」

「やってないですね！勇者様」

「さあ、さっさとこの平原から脱出しないでおきましょう！」

勇者達は、摩訶不思議平原を、何なくクリアしたのでした

↳第十六章↳摩訶不思議な平原の話↳（後書き）

悪魔・・・哀れですw

〜第十七章〜楽しい？町のお話

さてさて、勇者達は、摩訶不思議平原を抜けて、町の中に着ていました

町の名前は、「カーニバル」と言って、なんか楽しそうな町の名前なのでした

「なんか、ここ遊技場ばっかだなあ・・・」

「確かにそうですね、あ、さーかすと言う見せ物屋がありますよ？」

「本当ですね、なんか・・・ここ、結構楽しそうな場所ですね」

勇者達は、カーニバルと言う町で、色々と楽しむ事にしたのでした  
おい・・・さっさと魔王退治しろよとか、言いたいですが、まあ  
勇者ってかなり弱いですし、このぐらいの安息をあげたっていいでしょうね

「おい！今、かなり失礼な事を言ったな？」

「いえいえ、言ってますんよ？」

勇者達は、さーかすと言う、見せ物屋の中に入る事にしたのでした  
中は、円形状の建物となっていて、中央に舞台があるのでした

勇者達は、指定された席に座り、舞台が始まるのを待っているの  
でした

「勇者様？一体何が、始まるのでしょうか？」

「さあ・・・多分、何やらすごい男が出てきて、何か披露するのだ  
ろう」

そんな奴がいたら、見に来ないと思うんですけど？

「まあ、もうすぐ始まるみたいですし、気長に待ちましょう」

僧侶は、落ち着いた表情というか、満開の笑顔で座っているのでした  
どうやら物凄く楽しみにしている見たいです

「そうだな・・・何が出てくるのか・・・ぱっちり見るとするか・・・」

勇者は、ふつと深呼吸をしたのでした  
そして、すぐにシヨールは、始まったのでした  
シヨールの内容は、不思議な現象とか起こして  
人々をびっくりしたり、させたりしたのでした

「おお！なんかスゴいな！」

「ええ、なんか楽しいですね」

「むむ？あれは、何でしょう？」

僧侶は、建物の天井を見上げました

天井には、いかにも悪魔？って格好な生物が張り付いていました  
どうやら無料で、このショーを見ている見たいでした

「あのやろつ！悪魔のくせに！あんな卑劣な手を・・・！」

悪魔だから、卑劣な手も使うと思うんですけど？

「俺も！ああゆう手を使えば・・・！」

それは、正義の者としては、いけないと思うんですけど？

「勇者様、あの悪魔を倒しましょ！あれは、人類の天敵です！」

「そうです！あれを倒さないと、人類に災いが降りかかります！」

「え〜？なんか面倒だな・・・」

おい！勇者の癖に、戦いをめんどくさそうに言うてしょうか？  
まあ、弱い勇者ですからね〜臆病者なんでしょう

「おい！今の取り消せ！くっそ〜！！こいつを倒せばいいんだな！」

これを逆恨みと言うらしいですね

勇者は、悪魔に目標を決めて、剣を投げつけました

「ぐは！何奴！」

悪魔は、剣をもろにくらって、天井から落ちました  
それを見た観客達は、一斉にいなくなり、勇者達だけが残ったのでした

「む？せっかく見てたのに、邪魔するとは貴様達は何だ！」

悪魔は、自分に刺さった剣を抜いて、言いました

「誰かって？それはだな！お前等を倒す正義の者だ！」

「そうです！覚悟しなさい！」

「悪魔なんか！この世界からいなくなれです！」

「む？その格好、勇者達か！」

「人の話、聞けよこら！」

勇者が、そう言つと、悪魔はまるで演技っぽく高笑いをしたのでした

「はっはっは、俺を倒すだと？笑わせる！貴様等なんかボコボコにしてやる！」

いかにもやられ役的な台詞を言ってますね  
悪魔は、手から槍を出現させました

「む？戦う意思があるな！なら勝負！」

「どうやって？と言いたいですね？」

「だって、剣は、悪魔が持つてるのに？」

「何とかなる！」

何とかなったら、苦労はしないと思うんですけど？

「勇者様、私達に任せてください！」

「そうです！私達ならこいつに勝てます！」

おいおい・・・勝てるってはっきり言っちゃってるよこの人達  
悪魔は、顔を真っ赤にして怒ってます、まあ無理も無いですね

「とりゃあー！」

悪魔は、切れて勇者達に襲い掛かったのです

「甘いわよ！エナジーストーム！」

魔法使いは、いきなり強風が巻き起こる術を悪魔に向かって、打ち  
出しました

「ぐはあ！、こんな物で俺がやられるか〜！」

悪魔は、術をもろに食らって吹っ飛ばされたけど、すぐに立ち直ったのでした

「とりゃあ〜！」

悪魔は、槍を思いつき振り回し、勇者達に攻撃しました

「うわ！って痛った〜！」

勇者は、避けきれなくて、肩を怪我したのでした

「勇者様？大丈夫ですか？回復魔法をしますね！治癒能力（ヒーリング）！」

僧侶は、手を構え、回復魔法みたいな事をしました  
それを見た勇者は、こう思いました

（やっと僧侶の普通の魔法が見れた気がするな・・・）

しかし、思っていた事とやってる事が違っていたのでした、それは・  
・  
怪我した所に消毒液を塗って、バンソウコウを貼ってるだけなので  
した

「さって、修理完了、これで大丈夫ですよ？勇者様」

「ちよい待てこら！」

「何ですか？勇者様？」

「僧侶なら、ちゃんとした回復魔法使えよ！！！」

「この方法の方が治りが早いんですよ」

「貴様等！俺を無視するな！」

悪魔は、物凄く怒っているのです

「これでも食らえ！」

悪魔は、再び槍を構えると、勇者達に向かって、突っ込みました

「甘いわ！正義の鉄槌を食らいなさい！残像拳！」

僧侶は、拳を構えると、悪魔に向かって、素早く動き、拳をぶつけました

「ぐは！何だこいつはああ~~~~~!!」

悪魔は、どうやら衝撃には弱かったみたいで、簡単に吹っ飛ばされたのでした

「覚えてろよ~~~~ばいばいき~~~~ん!!」

なんか何所かで聞いた事あるようなやられ台詞を言いながら、悪魔は消えたのでした

「やったわ！私達の勝利ですよ！勇者様」

「あ、ああ・・・」

その場には、勇者の剣しか残らなかったのでした  
そして、どうなったのかと言うと  
勇者達は、見せ物屋を破壊した者として、この町から逃げるように  
出て行ったとさ

「それが、笑顔で言う事かあああ！」

く第十七章く楽しい？町のお話く（後書き）

結局、勇者の出番なかったですね

〈第十八章〉墮天使との遭遇のお話

さて前回、勇者達は、さーかすと言つ見せ物屋を破壊して、逃げているのでした

「こら！ぶざけんな！俺達は、逃げてる訳じゃない！」

え〜？どう見たって、逃げてる感じですよ？

ま、気を取り直して、勇者達は、火山に到着しました

「む・・・ここ、なんか暑いなあ・・・」

「そうですね、なんか頂上は、真っ赤に染まっていますし、噴火でもするのでしょつかね？」

「私、火山つて始めてですから、行って見ましようよ」

おいおい、僧侶ったら嬉しそうに、言ってるよ

どうやら彼女は、火山がどうゆうのか知らない見たいですね

「え？行くつもり・・・？」

勇者は、そう言いました

「ええ？そうですよ？」

「勇者様、もしかして火山の頂上に魔王がいるかも知れないですよ？行って見ましようよ」

絶対にいないと思われるのですけど？

「う・・・しょうがない、調べに行くか・・・」

勇者達は、結局、いるとも解っていないのに、火山の頂上に行く事になったのでした  
馬鹿な人達ですね

「なんか今、言ったか？」

いえいえ言ってますんよ

勇者達は、火山の頂上に向かいました

頂上は、凄い熱気に包まれていて、平均温度が高くて立っているのがやっとなのでした

「なんか、暑いなあ……」

「そうですね……やっぱりないんじゃないでしょうか？」

はっきり言って、いないと思いますけど？

「あ、勇者様、なんかありますよ？」

僧侶は、何かを見つけ、勇者に言いました  
それは、大きな石に、札が貼ってあったのでした

「なんか、物凄く怪しい物だな……」

「これ、「はがすべからず」って書いてありますし？どうします？」

「そうだな……危険な物かもしれんしな……はがすの……」

勇者が、はがすのをやめるかと言おうとしたその時

「えい」

僧侶が、いきなり、札をはがしたのでした

「あああ！何やってんだ！」

「え？これをはがすって事ですよね？」

「違ってます！」

もう遅いのです

石が大きな振動をして、破裂したのでした

中から赤色に染めた羽のある者が出てきたのです

「むづ……我の眠りから覚ます者はお前か？」

「ほら！なんか出て来たし！嫌な予感でしたんだ！」

「もう遅いですよ勇者様……」

「あゝ一つ聞きたいんですけど？」

僧侶は、出て来た者に言いました

「何だ？私に何か用か？」

「貴方は魔王ですか？」

「は？」

「だから貴方は、魔王ですかと聞いているのです！」

「違うぞ！私は、ブラッティエンジェル！墮天使だ！」

墮天使は、大声で言うのでした

「何故、お前は封印されてたんだ？」

勇者は、一応聞いてみる事にしたのでした

「私は、罪を犯したので、ここに閉じ込められていたのだ・・・  
だが！お前らのおかげで、我が野望、世界征服がかなう時！  
礼を言うぞ！若者達よ、あゝっはっは！」

おいおい、天使のくせに世界征服って言ってるし  
いいのでしょうか？

「良くないに決まってるだろ！」

ですよね〜こんな危ない奴だから封印されてたんでしょ  
だから倒した方が良いでしょう？

「そうですねよ！どうやらこいつは、悪い奴です」

「勇者様！こいつは悪と解りました！だから倒しましょう！」

「お前が復活させたんだろうが・・・」

そうですね、僧侶が復活させたんです  
だから責任は、僧侶に降りかかる筈なんですけどね？

僧侶＝「まあまあ、勇者様、力を合わせてこいつを倒しましょう」

「我を倒すだと？笑わせてくれる！はああ！」

駄天使は、手から剣を出現させて、勇者達に攻撃しようとしているのでした

こうして墮天使VS勇者達の戦いが、始まったのでした

「何でお前は嬉しそうに言ってるんだ？」

まあまあ、あ、駄天使を倒さないと、貴方達やられちゃいますよ？

「食らえ！神のいかずち！聯盟漸！（れんめいざん）」

墮天使は、剣から稲妻を発生させて、勇者達に攻撃するのでした

「うわ！危ない！」

「勇者様！ここは、私に任せて下さい！エターナルブロック！」

魔法使いは、呪文を言って、勇者達の周りにシールドを張って、防いだのでした

「む？避けるとは、なかなかやるな！だが！」

堕天使は、力を溜め込んでいるようです  
チャンスですよ？勇者様？

「そんな事は、解っている！とりゃあ！流星斬！」

勇者は、堕天使の隙をついて、攻撃しました

「く！まだまだ甘い！」

堕天使は、勇者の攻撃を武器で応戦しました  
その場は、異様な盛り上がりを見せています！さあ  
どっちが勝つのか？楽しみですね

「こら！何、バトル場とかにいる司会者っぽい台詞を言ってるんだ  
！」

「勇者様、助太刀します！はあ！残像拳！」

僧侶は、駄天使に向かって、拳を打ち出しました  
墮天使は、空を飛んで逃げようとした所を  
魔法使いが呪文を言っているのです

「逃がさないわよ！光れ！閃光のごとく！ライティングバスター！」

なんかどっかで聞いた事のあるような台詞を言いながら  
魔法使いは、無数の光の槍を発射して、墮天使に攻撃するのです

「ぐはあ！こんな事で私ができるか・・・って！あっ！」

そう、墮天使は気がつきました、それは・・・  
ここが火山という事で、丁度火口に急降下しているのです

「うわ！速く飛んで回避せねば！」

しかし、遅いのです、それは何故かって？  
それはですね、攻撃を受けて、羽が全部散っちゃったんですよ  
だから飛べはしないので、一直線に落ちるのです

「覚えてろよ！ああ、赤い服を着たおっさんが見える・・・」

何を言ってるのでしょうか？

墮天使は、意味不明な事を言って、火口に落ちたのでした

「何とか終わったな・・・」

「はい、危なかったです・・・」

「勇者様、これでこの平和は守られましたよ！」

「ああ、そうだなって・・・元はと言えばお前が原因だろうが！」

そんな事言ってる場合じゃ無いですよ？だって、さっきの衝撃で火山が噴火しそうなんですから？それを気が付かないで、言い争いをしてるなんて

馬鹿な人達ですね

「そんな大事な事、さっさと見え！」

こうして、勇者達は、火山から離れて、魔王のいる場所を探す事にしたのでした

↳第十八章↳墮天使との遭遇のお話↳（後書き）

一体いつになったら、魔王にたどり着くのでしょうか？w

〈第十九章〉新たな敵の出現のお話

勇者達が、火山をクリアした頃、暗黒城ではこんな会議があったの  
でした……

「まず、勇者撲滅大作戦の会議を始めるとする」

勇者撲滅大作戦会議って……貴方達何やってんですか？

「五月蠅いわ！我のする事にいちいち口を割り出すな！」

「で、魔王様、結局どんなプランなんですか？その……勇者撲滅  
大作戦って？」

悪魔は、魔王にその事を聞いて見る事にしたのでした

「ああ、そうであったな……まずこいついつ計画はどつだ？」

魔王は、こいつ言つのでした

「まずは、勇者の仲間達の事だ、こやつらはどうも勇者より強いら

しいのだ」

そうですね？だって、僧侶なんて聖職者のくせに武闘家みたいで  
すもんね？

「そこでだ、まずこの勇者の仲間達から消す事にしたのだ、どうだ  
？」

「そうですね〜・・・いいプランでは、ありますけど・・・  
なんか失敗するような確率が高いような気がします」

悪魔は、そう言いました

まあ実際、一回 その方法やって失敗してるので  
そう言うのは当たり前前かも知れませんか？

「じゃあ、どうすれば良いと思うのだ！悪魔！申してみよー！」

「う！私がですかあ〜？そうですね・・・」

悪魔が考えて、何かを言おうとしたその時  
声が聞こえたのです

「その件・・・私に任せて貰えないかしら？」

「お、お前は・・・妖欄ようらん！」

悪魔は、驚きました、それは何故かって？

それはですね、妖欄と言う女性は、めつたに姿を見せなくて悪魔も名前だけしか、聞いて無かったからですよ

「妖欄か・・・お前なら、勇者達を倒せると言いたいのだな？」

「ええ、この者達の力がどれだけあるか知らないけど、倒せるような気もするわね？」

妖欄は、怪しげな笑いを浮かべて言うのでした

「な、なら！お前に頼む！勇者達を打ち滅ぼしてまいれ！」

「了解致しました！でわ！」

妖欄は、手に呪符を持ち首に付けている紫の勾玉を触り  
こう言ったのでした

「闇のしもべたちよ・・・我が答えに答えよ！空読み！」

そう呟くと、妖欄の体が浮き上がり、何処かへと飛んでいったのでした

暗黒城には、悪魔と魔王が残ったのでした

「あの・・・魔王様・・・一つ聞きたい事が・・・」

「なんだ？申してみよ」

「あの妖欄って奴なんですけど、何者なんですか？どうも人間っぽいんですけど？」

「妖欄は人間だ、だが我の元で役にたちたいと忠誠を誓ったのだから、我の命令は聞くのだ・・・お前も、さっさと情報収集してこい！」

「は、はい、解りました」

こうして、妖欄が勇者達の所に行く事になったのでした・・・  
一方その頃勇者達はと言うと？

「火山も暑かったけど・・・ここはもっと暑い！」

そう、勇者達は何故か一面に広がる砂漠に来ていたのです。まあ、適当に選んだ道でここまで来たのですから  
すごいものでしょうな

「五月蠅い！そんな事言うな！」

「まあまあ勇者様、せっかく砂漠まで来たのですし、何か探しましようよ？」

「何かを探すって何をだ？」

「決まってるじゃないですか？お・た・か・らですよ  
この一面の砂漠には、絶対に遺跡とかありますって」

「そうですね、絶対にお宝がありそうな感じですよ」

僧侶も魔法使いもお宝の事にしか目がないみたいです  
さっさと魔王退治に行けよと言いたいですけど  
まあ、砂漠にいるのですしお宝探すのもありかも知れませんが  
ま、気を取り直して、勇者達は結局、相談した後  
お宝を探す事にしたのでした  
欲に釣られた愚か者達ですね

「あ？今、何か言ったか？」

「いえいえ何も言ってませんよ？」

勇者達は、遺跡とか怪しい場所を探す事にしたのでした  
そして数時間後・・・

「み、水・・・」

「つらいです・・・勇者様」

「こういう事になるならさっさと別の場所に行った方が良かったで  
すね・・・」

勇者達は、炎天下ではてて、倒れたのでした  
馬鹿な人達ですね〜それくらい気づく筈なんですけどね

「くそ・・・」

「あ・・・勇者様・・・何か飛んで来るんですけど・・・」

魔法使いは、上空に飛んでいる何かを見つけたのでした

「何かってなんだ？」

「鳥じゃ無いみたいですけど・・・人？」

そう言った瞬間、いきなりその何かから光線らしき物が勇者達に向かって撃ちだされたのでした

「なんか・・・明るいな・・・ってうわ！」

「勇者様、光線がこっちに向かってます！」

「何としても防げ！それが出来なければ逃げる！」

「もう、遅いです〜！」

そう、遅いのでした

光線は、真っ先に勇者達に直撃したのでした

まあ、この衝撃を受けたのですから一瞬で塵になりましたね〜

「ふむ・・・これで任務は終わったな、さて戻るとするか・・・」

その何かは、戻って行ったのでした

さあ、勇者達の運命は如何に！



く第十九章く新たな敵の出現のお話く（後書き）

勇者たちピンチ、さあどうなるって感じですね

〜第二十章〜砂漠でお宝のお話〜

さてさて、前回勇者達は、妖欄の攻撃をもろに食らって死んじゃいましたとさ

めでたしめでたし・・・

「おい・・・何がめでたしだって・・・？」

おっと失礼、どうやら勇者達は生きていたようです  
うち、死んだと思ったのにですね〜

「勝手に殺すな！」

「まあまあ勇者様、そう怒らずに・・・何とか助かったんですから」

「そうですね、この空洞があったから助かったんですよ？私達は、  
本当にラッキーですよね〜」

そう、勇者達は攻撃を受ける瞬間  
何故か地盤沈下にあい、空洞にいたのです  
どうやら攻撃を回避したようです

「ああ、しかし・・・ここは何だ？なんで空洞が・・・？」

「そうですね・・・ここになんか・・・あっ！」

魔法使いは、何かを思いつきました

「勇者様、もしかして遺跡の跡地じゃないですか？  
だからお宝がある可能性大です」

「お宝？本当にそんなのあるのか？」

「解りませんよ〜でも、とりあえずここにずっといるのも暇ですし  
お宝捜しに出発しましょうよ？勇者様」

魔法使いと僧侶は、お宝捜しがしたいと言っています  
どうします？勇者様？

「どつするって言われてもなあ・・・解った、行くかあ！」

おつ勇者様ったらものわかりが良いですね  
そんな性格だから強くなれないんですね

「おい！今、かなり失礼な事言っただな？言っただろ！」

いえいえ言ってますんよ〜

さあさあさっさとお宝捜しに出発しましょう

「こら勝手に決めるな〜！」

こうして、勇者達は砂漠のお宝捜しに出発する事になったのでした  
一方その頃、暗黒城では……

「ただ今、戻りました」

妖欄が暗黒城に戻って来たのでした

「おお！勇者達を倒して来たのか？」

「はい、奴らは生きてはいないと思われます」

「そうか……なら調べて見るぞ」

魔王は、懐から水晶球を取り出しました

「魔王様・・・それは、何ですか？」

「これか？これはだな、念じると相手の姿が見えるという  
なかなか良い球だ、これで勇者達を覗いて見るとしよう」

魔王は、何かをブツブツ唱えてから、水晶球を見ました  
水晶球に映し出された映像は、勇者達が元気に歩き回ってる姿が写  
りました

「おい！勇者達生きてるじゃないか！」

「え・・・嘘・・・有り得ないわ・・・だって・・・絶対生きてる  
筈がないもの」

そうですよね～あんな攻撃を食らったら生きてる筈無いですもんね？  
やっぱり運だけが強かったりするのですよね～勇者達って

「しくじったな！もう一回、勇者達を倒しに行つて来い！」

「はっ次こそは必ずや仕留めて参りましょう！」

こうして、再び妖欄は勇者達の所に向かうのでした  
一方その頃勇者達はと言つと

「勇者様〜こつちも見つかりましたよ〜」

「おお！そつちもか」

「勇者様〜こつちもです〜やっぱり探して良かったです〜」

勇者達は、偶然見つけた遺跡に入り

中に金銀財宝を見つけて、うきうき気分なのでした  
つち、羨ましいですね

「おい、今、なんか言ったか？」

いえいえ言ってますんよ〜？

勇者達は、金銀財宝を採り続けています

しかし、そこに妖欄がやって来るって事に気がついていなかったの  
でした・・・

〜第二十章〜砂漠でお宝のお話〜（後書き）

お宝発見すると、やっぱりだれでも油断するよねw

〜第二十一章〜砂漠でお宝発見のその後の話〜

さてさて、前回勇者達は、遺跡を発見し、金銀財宝を奪っていましたが  
犯罪者ですね

「何でだ！」

ナレ!! え〜だって、不法侵入に窃盗ですよ?

これじゃ、正義の者としては、やっちゃいけない事なんですけどね

「五月蠅い! 見つけたから、いいんだ! 第一、持ち主なんていない  
し!」

「そうですよね〜持ち主がいたら、文句言っってくる筈ですから」

そう言う問題でしょうか?

まあ、さておき、勇者達はまだまだ金銀財宝を探しています  
すると僧侶が、こんな事を言いました

「勇者様、奥の部屋に行っで見ませんか? なんか怪しげですし」

「奥か・・・一体、何があるのだろうな？」

「きっと、かなり高価な物があるかもしれないですよ？」

あるとは、思えないんですけど？

「まあ、ここも結構探したからな、行ってみるか」

こうして、勇者達は、遺跡の奥の方へと行くのでした  
一方その頃

上空を飛んでいる者がいました、それは・・・

「確か、ここよね？勇者達を倒した場所は」

そう、何かを探しているのは、妖欄なのです  
妖欄は、勇者達を探しているみたいです

「私の魔術、エターナルバースト食らって生きてる筈無いんだけど  
な・・・」

エターナルバーストとは、妖欄の魔術で、半径五メートルは吹き飛ばす

光の光線みたいな技なのでした

「勇者達みつからないわね・・・ん??」

妖欄は、何も無いでっぱりから、白い煙がたちこめているのを発見しました

「あれは？あそこに人がいるって事は・・・もしかして勇者達か！？」

妖欄は、煙が出ている場所に向かう事にしました

でも、一つ気になりますよね？何故、煙が出ているのかを？

その原因を辿って見る事にしましょう

妖欄が煙を発見する十分前

勇者達は、奥の部屋に到着しました

奥の部屋は、空洞になっていて、中心に扉があるのでした

「勇者様？この扉を開ければ何かあるのでしょうか？」

「何かあってなんだ？」

「やっぱり伝説の宝でしょう！早速開けましょうよ？」

いつから伝説の宝になったんでしょうか？

「そうだな・・・でも、開けたらトラップが発動して、良くない事が起きるのではないか？」

勇者様？そんな事気にしてたら先に進めないですよ？

ほら、開けないか開けるかさっさと決めて下さいよ

「こら！何でお前が命令するんだ！」

えくだって、そうしないと物語が進みませんから  
ほらさっさと決める

「く・・・解った、開けてやる」

勇者は、扉を開けようと思いました、しかし開きませんでした  
無駄な努力でしたね

「お前が言つな！」

「勇者様、ここは私に任せて下さい」

僧侶は、拳を構えると、扉に向かって拳を打ち出しました

「はあ！一撃必殺！正拳突き！」

僧侶は、拳に力を込めて、扉に向かってパンチを繰り出しました

「あゝたたたたたたたほあっちゃあ！」

一撃必殺と言ったのに、連打で拳を繰り出します  
僧侶の拳で、扉は粉々に壊れました

「勇者様、開きましたよ」さあ、進みましょう」

「開いたんじゃない、粉々に粉碎しただけだろうが！」

「細かい事は気にしない、さあ進みましょう」

「そうですね、そんな事いちいち気にしてたら、この先やってけないですよ？勇者様」

「まあ・・・いいか・・・よし、行くぞ！」

勇者達は、最初の一步を踏み出した途端  
ポチっと言う音がしたのでした

「おい・・・今、ポチって・・・」

「確かにになりましたね・・・」

「何か良くない事が起こるのでしょうか？」

そのとおりです、ポチっ と 押し した瞬間、白い煙が出て  
勇者達を包み込んでしまいました  
あっはっは、馬鹿な人達ですよ

「お前に言われると、かなりむかつくんだけど！」

「勇者様〜前が全然見えません〜」

「なんか、かなり眠くなって来ました・・・おやすみ〜」

「そう言えばなんだが・・・眠く・・・」

勇者達は、トラップに引つかかって眠りについてしまったのでした  
それが白い煙の原因だったのでしたとさ  
一方妖欄は

「この煙は……一体……？ん？」

妖欄は、その煙の中に入った瞬間、猛烈に眠くなったのでした

「く！これは罨か！勇者達め、こんな罨をしかけて……！」

全然違うんですけど？どちらかと言えば、勇者達はその罨に引つか  
かっただけなんですけどね？

妖欄も人の子ですので、ぐっすり眠りについてしまいました  
さて、これから本当にどうなるのか？本当に楽しみですね

〜第二十一章〜砂漠でお宝発見のその後の話〜（後書き）

洞窟には、トラップがあるのは、当たり前かなw

〜第二十二章〜砂漠の数々の畏発動の話〜

さてさて前回、勇者達は砂漠の遺跡の中にいて、トラップを踏んで眠りについてしまったのでした、それで追って来た妖欄も畏にはまり眠りについています、さあどうなる!?楽しみですね〜

「く・・・どうなるじゃないだろ!」

おや?どうやら勇者達の方が、先に目を覚ましたみたいですね?

「勇者様・・・大丈夫ですか?」

「ああ、何とかな・・・しかし妙なトラップだったな・・・」

「そうですね・・・あっ勇者様、トラップは終わったみたいですし、先に進みましょうよ?」

「そうだな・・・、奥に進むか!」

どうやら勇者達は奥に進むみたいですね〜  
欲深き者ですね〜勇者達って

「五月蠅い!とりあえず俺達は奥に行くぞ!」

「おお〜！」

勇者達は、奥の部屋に行く事になったのでした  
一方その頃

「く……私とした事が……」

外で眠っていた妖欄は、気を取り戻し、勇者達を追っているのです

「あんな古典的なトラップに引つかかるなんて……私も未熟だな！  
それにしても、勇者達め、私があると解ってトラップを張ったのだ  
な！」

全然違うんですけど？どつちかと言うと、たまたま  
勇者達がトラップを発動させただけなんだけどね〜

「待っている！すぐに血祭りにあげてやる！」

これを逆恨みと言うらしいですけど、勇者達も災難ですね  
妖欄は、勇者がいると直感で思ったらしく、遺跡の中に入りました  
でした

一方勇者達と言うと

「勇者様〜、助けて下さい〜！」

「だから踏むなって言っただろ〜〜〜！」

勇者達は、僧侶が踏んでしまったトラップ、踏むと大きい岩石が何所からか出てきて転がるというダンジョンとかにありそうなトラップから逃げているのです

「お前が踏んだんだから、何とかしろ！」

「わ、解りました、はああ！」

僧侶は、立ち止まって気合を溜めたのです

「はあ！唸れ鉄拳！、フライングアッパーー！」

そんな技、何所で覚えたんでしょうか？僧侶は飛び上がりながら岩石を粉々に破壊したのでした

「ふう・・・これで終わりましたよ？勇者様」

「ああ、何とかな・・・でもなあ、これからそういつトラップを踏まないように！」

「はい解りました・・・って、あっ」

勇者がそう言った後、魔法使いがポチっと言う嫌な音がするのを押し  
してみたかったです  
どうやら踏んじやった見たいですね

「嬉しそうに言うな！こら！」

遺跡内は、大きい地鳴りが響きました

「なんか物凄く嫌な予感がするんだけど？」

「私ですよ、なんか来るのでしょうか？」

「勇者様！あれ！大量の水が流れて来ます！」

「え！？」

勇者は、僧侶が指差した方向を見ると、大量の水が勇者達に向かって流れてくるのでした

「うわあ~~~~~！」

「な〜が〜さ〜れ〜ま〜す〜」

「……………」

勇者達は、大量の水で流されてしまったのでした  
気分は水洗トイレ見たいな感じなのですが、まあそれは言わない事  
にしましょう

一方その頃、妖欄はと言うと

「く……本当にここに勇者達がいるのか？」

妖欄は遺跡に入って勇者達を探しているのです  
そして何か大きな地鳴りが聞こえてきました

「ん？何だ？この地鳴りは……？つてえ何！？」

妖欄は前から、大量の水が流れて来るのが解りました  
ちなみに一本道ですので、後ろに逃げるしか無いのですが、  
逃げられなかったのです

「うわ！今回、こんなのはっか〜！」

妖欄は、またトラップにはまって流されてしまったのです  
そして、どうなったのかと言うと？勇者達と妖欄は遺跡の外  
に放り出され、砂漠に到着したのです

「う……結局、砂漠に逆戻りか……」

「そ、そうですね……」

「あ……きつかった……って勇者様！大変です！」

「一体どうした！」

「遺跡で発見したお宝が無いです……無くなってしまいました……」

「な、何iiiiiiii!!」

勇者達は、自分達の持ち物を調べました  
けれども遺跡で見つけたお宝は、何所にもありませんでした  
不幸な人達ですね

「くっそ〜！せっかく見つけたお宝を……なくすとは……」

「これで、色々な武器とか買えると思ったのに……」

「勇者様……、もうここにもなんか意味が無いように見えま  
すから、移動します？」

「そうだな……もうここはいい！移動するぞ！」

「はい、了解しました！」

「行きましよう、勇者様」

勇者達は、砂漠を出る事を決意し、移動したのでした  
一方、妖欄はと言うと

「く・・・またしても、勇者達め！それにしても・・・これは何だ？」

妖欄が目覚めたら、その場に沢山の金銀財宝があったのでした

「これは良いな、早速戻って軍事金にでも変えるか」

妖欄は、お宝を全て持って暗黒城に戻る事にしたのでした・・・

く第二十二章く砂漠の数々の民発動の話く（後書き）

勇者達、災難ですねぇw

## 〜第二十三章〜音楽の町のお話〜

さてさて勇者達は、砂漠を越えて、街に着きました  
この街の名前は、メロデルと言って、音楽家達が街中いる街なので  
した

「勇者様〜ここは、凄いですね？何所からか音楽が聞こえてきます  
し？」

「そうだな、音楽か・・・そう言えば修行ばかりで、流行曲とか  
知らなかったな」

「私ですよ、昼は神に祈って、夜は武術の稽古をしていましたか  
ら、音楽は聴かなかったですね」

勇者達は、歩き回りながら音が聞こえる場所へと向かっているので  
した

音の聞こえる場所は、公園で一人で演奏している若者がいました

「あ、ここで演奏してる」

「本当ですね、勇者様」

「あ〜、何の曲を演奏してるのですか？」

僧侶は、若者に何の曲を演奏してるか聞く事にしたのでした  
若者は、演奏をやめると、こう言ったのでした

「ハロ〜プリティガール、こんな場所になんのようや?」

若者の言葉遣いは、明らかに変だった

と言うか、こんな人普通じゃないと思うけど?  
でもここにいるのだから、まあいいでしょうね?

「何だこいつは?」

「こんな不思議な話し方をする人、初めて見ましたよ」

「おう!俺の名は、ビート、流浪の音楽家さ、俺の夢は、世界に通  
じる音楽を作る事なんや」

流浪の音楽家、響きはかつこいいですけど  
やっぱり変人ですね?この人

「ちなみにさつき弾いていた曲は、赤き翼と言う曲なんや  
聞かせてやろう!魂のBEATを!ハッハッハッハ!」

えらく元気ですね、勇者達は呆れているみたいですが  
ま、当然ですね、ビートは、自由?赤き翼を演奏したのでした

「・・・不思議な感じのする曲だな・・・な!」

勇者はある事に気がつきました、それは自分の体がまともに動かなかったのです

「勇者様！どうしたんですか？」

「体が・・・動かん！」

「あ、本当！何これ！？」

「ふっふっ！これが俺のサウンドスペル、赤き翼なんや

これはな？相手の動きを止める動きがあるんや、どや？効いたやろ？」

「お前・・・何者だ！」

「俺？俺は音楽家だって、徒のな」

「そんな音楽家、普通いないぞ！」

「そうですよ！そんな人、普通にいませんよ」

「まあ、そう怒るなや、すぐに効果は切れるからな」

ビートが、そう言うと、確かに動けるようになったのです

「ふう・・・効力は解った、でもこの能力を何に使った？」

「それはやな？相手が逃げないように、俺の演奏を聞かせてやるためや」

「酷い人ですね、束縛してるよ？」

「そうか・・・じゃ、邪魔しちゃ悪いな、俺達は行くよ」

「おう、また曲聞かせてやんよ、じゃな」

勇者達は、ビートから離れたと言うか逃げたのでした

「変な奴だったな・・・」

「そうですね、曲はいいんですけどね・・・」

「勇者様へ他にまだ行ってない場所ありますから、そこに行きましょうよ？」

「ああ、そうだな、そうするか」

勇者達は、メロデルの街をさまよう事にしたのでした  
一方その頃暗黒城では

「うむ、資金は入った、だが！勇者はまだ健在だ」

人類の天敵の魔王が悩んでいました、そして水晶球を取り出して中を覗き込んでいます、何が見えるのでしょうかね？

「む？勇者達は、音の街、メロデルにいるか・・・全軍に命令をする！即刻討伐に行つて来い！」

魔王は、部下達にそう指示を出すとこう言ったのでした

「さて、はまってる人生ゲームでもやるか・・・」

魔王が人生ゲームにはまってます

あははははは、魔王は何の人生を送ってきたんでしょうか？

「む！破産だと！この魔王が破産だと！？笑わせてくれる！」

魔王は、どうやら破産に追い込まれたようです  
子供ですね、あはははは

「ふう・・・、ゲームクリア、さすが我だな」

数十分後、魔王は人生ゲームを放棄したのです。そして、しばらく何か考えて、すっと消えたのです……

く第二十三章く音楽の町のお話く（後書き）

音楽の町、なんか楽しそうですね

〜第二十四章〜音楽の町の戦いの話〜

さてさて、勇者達は、音の街、メロデルに辿り着き  
ビートと言う変人？に遭遇したのですた

「確かに変な奴だったな・・・」

「そうですね、でも結構面白かったですよ？」

「そうですねよ、音が良かったですし」

「まあな・・・」

勇者達は、メロデルの町を巡回しているのですた  
しかし何処を行っても、街の中は音楽家でいっぱい  
何処からともなく音が聞こえて来るので、勇者達は少し疲れたので  
した

「良いメロディなんだけど、こつこつと聞いてるとさすがにな・・・」

「そうですね・・・少し、静かな場所に行きたいですね・・・」

勇者達が、そんな事を言っている頃  
妖欄はと言つと・・・

「ここが、メロデルの街か・・・」

「そつらしいですね?」

妖欄の後ろには、手下と思われる悪魔がいるのでした  
まあ、いたって所詮雑魚キャラですので、弱い事には変わりないんですけどね

「五月蠅い！私は、修行して強くなったのだ！」

ほ?どんな修行ですか?まあ雑魚キャラともう決まってるので修行しても大して強くないと思いますけどね

「もうそのぐらいにしたらどうだ、この街を攻めるぞ！」

「は！了解しました！」

妖欄が、そう言つと悪魔は頷いたのでした  
さて、これからどうなるのでしょうかね  
一方その頃、勇者達はどうかと?

「ん?何だあれ?」

勇者達は何かを見つけたようです  
一体、何でしょうね??

「あ、勇者様?あの人、ビートさんじゃないですか?」

「あ、本当だ」

勇者達が目撃したのは、ビートがギターを持って演奏しようとしているのでした

「おう！お前らまた会ったな、どや？この街は？」

「音楽家達がいっぱいいて、五月蠅い国だよ、はつきり言って」

「まあな、それは仕方ないんや、この街は、昔から音楽が中心やっ  
たんやから」

「へ〜そうなんですか」

「よし、ここで会えたのも何かの縁や、一曲弾いたるで〜」

「いや・・・いい」

勇者が、断ろうとした時

別の場所から、爆音が聞こえたのであった

「何や？あの爆音は」

「なんか、やな予感・・・行ってみるか・・・」

「そうですね、勇者様」

「もしかして、敵かも知れませんから、武装していきますね」

僧侶はそう言うのだが、前と変わらない格好で現場に向かったのでした

「この街は、非常に迷惑だ、魔王様の命令によってこの街を破壊する！」

妖欄は、杖からエネルギー弾を作り出し、家々に向けて発砲しました

「食らえ！エターナルジェレイド！」

杖から無数の光の弾が拡散して、四方に散らばり、落下した瞬間爆発して

辺りは紅蓮の炎に包まれたのです

「わっはっは、これが我々の力だ！すぐに降伏するがいい！」

あのお？貴方、なんもしてないのにいばって恥ずかしくないんですか？

まあ、悪魔にそれを言っただって、無意味かも知れませんか

「うわ！街が燃えてる・・・」

おや？どうやら勇者達が到着したようですね  
これはバトルですか？さあ、とっとと始めましょう

「だからお前は、何でそんなに嬉しそうなんだ？」

いえいえ？別に嬉しそうじゃありませんよ？

妖欄は、勇者達を見つけると、こう言いました

「いたな？勇者達よ、この前は数々の罠にはめてくれたな！」

「え？何の事？」

「そうです、一体何の事ですか？」

「全然、記憶に無いんですけど？罠って？」

妖欄「貴様ら！私への数々の侮辱をして置きながら  
その態度は何だ！許せん！成敗する！」

あらら、完璧に怒ってますね

まあ、当然ですね、勇者達も災難ですね

「私も手伝うぞ！はあああ！」

悪魔は、手に力を込めて剣を作り出しました

「勇者様！こうなれば戦いましょう？」

「そうですね！この街を焼き尽くす気ですよ！  
そんな事は、私達正義のメンバーが許しません！  
勇者様、戦いましょう！」

「ああ！そうだな！各自戦闘態勢だ！」

「はい！」

「了解しました！」

こうして、妖欄&悪魔&勇者達の戦いが始まるのでした

「ふ．．．ここは、俺の力が試される時やな．．．」

ビートは、一人、そんな事を言っているのです．．．

↳第二十四章↳音楽の町の戦いの話↳(後書き)

さあ、この次どうなるのか？って感じですねえ

〜第二十五章〜音楽の町の戦いのその後の話〜

さてさて、前回、勇者達は妖欄達と戦う事になったのでした  
さて、どっちが勝つのか？楽しみですね〜w

「だから、なんでお前は嬉しそうなんだ！」

まあまあ、あ、どうやら相手はやる気マンマンみたいですよ？  
さっさとバトっちゃいましょう

「く・・・良し、戦闘準備開始！」

「はい！解りました！」

「こっちも準備OKです〜」

「行くぞ！うおりゃあああ！」

勇者達は、それぞれの武器を構えると妖欄と悪魔に向かって突進し  
たのでした

「我々の力を甘く見るな！エターナルジェレイド！」

妖欄は、杖を持つと、無数の光の玉を勇者達に向けて放つ  
勇者達は、飛んで来る光の玉を見たのでした

「うわー!どつすればいい・・・」

「勇者様!ここは私にお任せを!エレメンタルブロック!」

魔法使いは、光の壁を作り出し、弾を全て弾いたのでした

「む、やっかいな・・・おい!」

「え?私ですか?」

「お前も援護しろ!この役立たずめ!」

「わ、解りましたよ、人使い荒いんだから」

人じゃなくて悪魔なんですけどね?

「しょうがない・・・はあああ!」

悪魔は、気合を溜めて勇者達に突撃したのでした

「食らえ!突き突き突きい〜!」

あの〜？そんな技しか無いのでしょうか？  
まあ、雑魚キヤラですから弱いんでしょうなあ〜

「そんなの当たるか！」

勇者達は、軽々と避けて相手にしていません  
どうやら眼中に無いようです、可愛そうな悪魔ですね〜

「五月蠅い！はああ！ブラックホール！」

何ですか？その技は？まあ説明しますと  
手から黒い球体を発生させて、何でも吸い込むという恐ろしい技で  
すね

でも、そんな高等な技、使って大丈夫なんでしょうか？

「大丈夫に決まってるだろ！これでも食らえ！勇者！」

悪魔は、ブラックホールを勇者に向かって投げつけました

「む……とりゃあ！流星斬！」

勇者は、ブラックホールを真っ二つに切ると  
遠くに飛ばして、消滅させたのでした



「そうです、覚悟なさい！」

「謝るなら今のうちですよ？でも許しませんけど」

おいおい一人ちょっと酷い事言ってますね？

「あいつは使えなかったな！だが！私はここでくたばる訳にはいかん！」

妖欄は、そう言うとかかぶつぶつ言っているのです

「何をしてる！」

「破滅の道を共に歩まん！グランドオーシャン！」

妖欄がそう言うと、地響きが起こりだし、家が次々に崩壊して行くのです

「勇者様、何かやばいです！一旦逃げましょう！」

「私もそう思います、ここはひとまず退散した方がいいです！」

「確かにな！良し撤退！」

「させるか！」

妖欄が、そう言ってから杖を地面に叩く  
すると勇者の周りが炎に包まれて、逃げ場を失ったのでした  
これはピンチですね、大丈夫かな？勇者達は？

「大丈夫な訳無いだろ！一刻も早く消化するんだ」

「はい！エターナルアクアブルー！」

「私も！水！水！えいえいえいいい！」

しかし、全然火は消えなかったのでした  
ここまでかな？勇者達の旅は？ここでゲームオーバーですかね

「なんかそう言われるとむかつくぜ！  
俺達は絶対、生き残ってやる〜！」

でも、火は全然消えてませんよ？  
一体どうやって助かるんですか？

「く・・・それを考える所だ！」

「勇者様〜かなりやばいです〜」

「ここでやられたら正義の者として恥をさらす事になります・・・」

「はははは！勇者！ここで貴様等の旅は終わりだ！覚悟！」

妖欄がトドメをさそうとした時、何処からか声がしたのでした

「待てやあ！この街を壊されてたまるかってもんや！これでも聞けやあ〜！」

「な、何奴！」

妖欄が驚いてると。音楽が聞こえてきたのでした

「な、なんだこの音楽は・・・頭が・・・頭が割れるほどに痛いぞ！やめろ！音を止めろ！」

「どや！これが俺のサウンドスペル”水の囁き”や！敵め！往生せ

いやー」

「あの声はやっぱりビート……これは俺達の味方って事になるのか？やっぱ？」

そうらしいみたいですネ？

さっきの音楽で、妖欄の術が解けて、炎が消滅したのですた

「チャンスですよ！勇者様！一気に攻めましょう！」

「ああ！敵め！これでも食らえ！流星斬！」

「何！？ウアアア！」

妖欄は、直ぐに立ち直って防御しようとしたが、どうやら間に合わなかったみたいですネ

妖欄は、避ける事も出来ず、食らって倒れたのですた

「ぐふ……私の負けだ……」

そう言い残すと、気を失ったのですた  
こうして、勇者達が勝ったのですた

「勝ったな・・・何とか」

「ええ、そうですね・・・」

「私はちょっと疲れました・・・でも、勝ったから嬉しいですよ  
やっぱり正義は勝つ！ですね」

「そうだな！これ以後は魔王を倒すだけだな！休んだら魔王退治に  
出発するぞ！」

「はい！」

「了解です！さっさと魔王を倒して、世の中を平和にしましょう！」

勇者達は、そう言つと

休んでから魔王討伐に出発したのでした

「やっぱり、俺の音楽は最高やな、これからも極めたるで〜」

ビートは、そう言つと音の街モデルに留まって音楽を作る事に専  
念したのでしたとさ・・・

く第二十五章く音楽の町の戦いのその後の話く(後書き)

決着がついたけど・・・ビート・・・何者？w

〜第二十六章〜魔法の国のお話〜

さてさて、勇者達は、妖欄を倒した後  
国に、着きました

「なんか広い国に着いたな？」

「そうですね？勇者様？」

「勇者様？この国の名前は「マフーガ」と言っらしいですよ？  
魔法使いの修行国と書かれてありますよ？」

勇者達は、どうやら魔法の盛んな国、マフーガに着いたようですね？  
一体ここで何をするのでしょうかね？

「知るか！まあ、とりあえず着いたから色々を見て回るか？」

「そうですね？私としては、魔法の勉強になりそうですね？  
見て回りましょう？」

「そうですね？、私もここに何かあるか見て回りたいです？」

「よし！じゃあ行くか！」

勇者達は、魔法使いが集う国、マフーガの国を見て回ることにしたのでした

マフーガの国の中

マフーガ国内は、随分広くて、魔法使いの格好をした人達がわんさかいたのでした

「うわあ・・・やっぱり多いな？魔法使い」

「そうですね？でも、こんなに多く集まって一体何をするのでしょうね？」

「勇者様・・・なんかあそこに集まっていますよ？」

僧侶は、何かを発見して勇者に言いました  
その場所は、広場になっていて  
人が多くいて、騒いでいたのでした

「一体、何があつたんだ？ちょっと見てみるか」

勇者達は、広場に集まっているのを見て、その場所に行く事にしたのでした

はつきり言って、野次馬ですね

「五月蠅い！」

広場

「あ、なんか話し合ってるな？」

勇者達は、広場に二人の魔法使いが言い争っているのを見つけました

「貴様？この私の言う事が聞けないのか！この私、白魔術協会にはむかう愚か者め！」

白魔術協会と名乗った白い服を着た魔道師は、黒い服を着た魔道師に向かって言っているのです

「何を言う！我が黒魔術協会こそが、この国を支配するのだ！白魔術協会ごときに、この国を守るか！」

そう言って喧嘩していました

「一体、これはどういう事なんだ？」

「勇者様？これはもしかして、この国を二つの組織が争っているのではないですか？」

そうですね？大体そんな感じになっているみたいですよ

「どっちを助けます？お互いに喧嘩してますけど、どっちも悪いよ  
うな気がしますしね？」

「確かに・・・こんな所で喧嘩しているのだからな？とりあえずほ  
つとこつ」

「そうですね？余り関わらないほうが良いですね？」

「そうだ、だから見なかった事にしてとつと別の場所に行こつ」

勇者がそう言って立ち去ろうとした瞬間  
喧嘩している者達がこんな事を言っているのです

「まだ解らないか！なら魔法で成敗してくれる！」

「やって見る！返り討ちにしてくれるわ！」

そうしてお互いに呪文を唱えたのです

「食らえ！光の光刃！シャインセイバー！」

「行くぞ！闇の刃！ダークネスソード！」

お互いの魔法は、立ち去ろうとした勇者達に直撃したのです  
勇者達、災難ですね

「うわあ！痛ってえ！何するんだ！」

「勇者様！大丈夫ですか？」

「何とかな・・・でもな・・・無関係な人巻き込むな！」

まあまあ、そう怒っていると早死にしますよ？

「五月蠅い！」

「魔法をぶつけたのはすまん、だが！お前達は強いと思われる、我々白魔術協会と

協力して、黒魔術協会を滅ぼしてくれ！」

「何を言う！我々黒魔術協会と手を組み、白魔術協会を倒すのだ！」

どうするのですか？両方から見方になれって言ってますね？

「どっちも加勢するか！要するに両方倒せば、この喧嘩も終わるって事じゃないのか？」

「あ、そうですね？じゃあお互いに謝らないなら、両方倒しちゃいましょう？」

「これは仕方が無いですよ、だってお互い協力しようとしてませんから、

やられたって文句を言わない筈ですよね」

それを聞くと、喧嘩していた者達は、何故か逆ギレして勇者達に襲い掛かってくるのでした  
結局戦うしかないみたいですね

「我々を倒すだと？笑わせてくれる！食らえ！光の光刃！シャインセイバー！」

「こちらも行かず！闇の刃！ダークネスソード！」

「どうやら話し合いで解決しないみたいだな・・・行くぞ！」

「はい！エターナルブロック！」

魔法使いは、飛んでくる光の刃と闇の刃を弾き返しました

「どっちも悪いみたいですから成敗します！はあああ！」

僧侶は、拳に力を込めました

僧侶「食らいなさい！正義の鉄拳！フライングクロスハリケーン  
アツパ〜！」

なんか技が次第に豪華になってきてますね？特訓でもしたのでしょ  
うか？

僧侶は、拳を連打しました

「あたたたたた！とりゃ〜！」

拳を連打して、蹴りを加えてふっ飛ばして両方気絶させたのでした  
恐るべしですね

「これではらくは喧嘩はしないだろうな？とっと他の場所を見  
てみるか・・・」

「はい、では行きましょう勇者様」

「正義は勝つ！悪は滅びる！私達の勝利」

というか僧侶の一人勝ちだったのでは？

勇者達は、マフーガ国を見て回る事にしたのでした・・・

「く……強い……あの子を我が白魔術協会に……」

黒魔術師より、目が早くさめた白魔術師は、そう言つと勇者達の跡を追いかけるのでした

さて、これからどうなるのか？それはまだ誰にも解りませんでした。  
・  
・

↳第二十六章↳魔法の国のお話↳(後書き)

面白い展開になってきたかな？

## 〜第二十七章〜白魔術協会の話

さてさて、前回、勇者達は魔法使いが集う国「マフーガ」に着いて喧嘩を売られて、戦って逃げたのでした

「おい！なんでそういう事になってる！」

まあ、それは置いていて、勇者達はマフーガの国を見て回っていたのでした

「ここは、本当に魔法使いが多いな・・・」

「そうですね、なんでこんなに多いのでしょうか？」

「さあ？」

勇者がそんな事を言うと、僧侶がこんな事を言っているのです

「きつと、魔法で楽したいからこんなに集まったのではないですか？」

僧侶の言う事も一理ありますね？だつて

住人は、魔法で空を飛んだり、物を作ったりしていますからきつと楽しかったんでしょうね

「俺も魔法が使えたら、もしかしたら今後役に立つかもな？」

おや？どうやら勇者は、魔法に興味があるようですね？

「なら、我々、白魔術協会に入らないか？どなたでもすぐに魔法が使えるようになるぞ？」

いきなり勇者に声をかけたのは、さっき戦った白魔術師でした

「うわ！いきなり話しかけるなよ！びっくりするじゃないか！」

「そうですよ？勇者様には、私がいまから魔法なんか使えなくても大丈夫ですって」

「でも、使えた方が便利だぞ？まあ、物は試しだ、やってみないか？」

「勇者様？やってみてはいかかですか？もしかしたら一つぐらいは覚えるかもしれないですよ？」

僧侶は、そう言う、勇者は迷っていた

「そうだな・・・なら一つぐらいなら・・・ちなみに、どんな術を教えてくださいるんだ？」

「そうだな・・・まず、火の呪文を教える、これなら初心者でも出来る代物だ  
まず、こう言っ」

白魔術師は、杖を構えると、こう言いました

「ファイガ！」

そう言っつと、杖から火の玉が出て、消えたのでした

「これだ、杖を貸してやるから、やってみるといい」

白魔術師は、杖を勇者に貸したのでした

「勇者様、頑張っして下さい」

「行くぞ・・・ファイガ！」

勇者がそう言っ、しかし・・・  
一分後、二分後・・・十分後、何にも起こらなかつたのでした  
どうしてでしょうね

「知るか！なんで何も出ないんだ！」

「どっやら、お前・・・魔法使いの才能らしいな」

才能0、て事は、一つも魔法使えないって事です  
あははは

「笑うな！くそ・・・俺は剣技しか出来ないって事か」

「おかしい、何故一つも出来ないんだ？子供でも一つは覚えるのに？」

「あ、そう・・・もういい、俺達に用はもうないだろ・・・？」

「いや、ある」

白魔術師は、また何か言おうとしているのです

「実は、黒魔術協会に対抗するべく  
味方が欲しいのだ、そこで黒魔術協会を倒すべく、味方になって欲しい  
よろしいかな？」

白魔術師は、味方になれと言っていますね？  
どうします勇者様？

「..びびるって..びびるって..」

「そうですね？片方が潰れればこの街も少しは、良くなるのではないですか？」

「私は賛成します！だって白は正義の証！黒は悪の証です！だから味方になりましょうよ勇者様」

僧侶は、やる気マンマンで言っています  
これは、やるしかなさそうですよ〜？

「しょうがない・・・味方になってやる、これでいいだろ??？」

「では、決まりましたな、我々白魔術協会本部に案内します  
さ、ついて来て下され」

こうして、勇者達は、白魔術協会のメンバーになりました  
さて、これからどうなるのか？それはまだ解らないけど  
多分、面白い展開になってると言う事だけは解ってるんですよ

↳第二十七章↳白魔術協会の話↳(後書き)

意外な展開になってきたかな？

〜第二十八章〜白魔術協会のアジトの話〜

さてさて、勇者達は白魔術師の手先となり  
黒魔術師を討伐する事に決定したのでした

「誰が手先になった！誰が！」

え〜だって？協力するって事は、手先になったと同じ事ですよ〜？  
ま、それは置いといて、勇者達は白魔術師に案内して白魔術協会に  
行ったのでした

白魔術協会

「さあ、ここが我々白魔術協会だ」

勇者達は、それを見て一言、こう思ったみたいですね？

(これって・・・唯のテントじゃないか？・・・？)

(これって、テントだよね・・・それを白魔術協会って・・・)

(もしかして、このテントの中に秘密組織が？)

勇者達が、驚くのも無理がありませんでした  
だって、唯の布のテントですからね〜？

僧侶なんて、変な期待を持つてるみたいですし、これからどうなる

んでしょうね？」

「どうした？なんか言いたい事でもあるか？」

「一つ聞きたい、これが本部？」

「ああ、そうだが？」

「もうちょつとましな物は無かったんですか！？例えば普通の家の中とか！」

「そういうが、この白魔術協会もなかなか便利なのだぞ？  
通気性が良いし、日当たり良好なのだがな？」

テントですから、風通しも良いですし、日当たりも良いですよ

「勇者様・・・これは、本当に白魔術協会なのでしょうか？」

「さあ・・・本人がそう言ってんだから、間違いないかもな？」

「勇者様、さつさと入りましょ？w何があるか解りませんしねw」

僧侶は、入る気満々で言っています  
どうします〜？勇者様？

「どつするって・・・そりゃ、断るのも悪いしな、入る事にするよ」  
勇者達は、そう決めて、白魔術協会？  
テントの中に入る事にしたのでした

「あ、ちよつと待て・・・」

「え？」

白魔術師が言い終わる前に、床に大穴が開きました  
これは、典型的な落とし穴ですね  
それにすっぱりはまったみたいですね

「うわあああ！ー！！」

「きゃあああ！」

「秘密の部屋へ、ご案内〜ですか〜？」

僧侶だけ、別の事を思っているらしいですね

勇者達も、いきなり落とし穴 災難ですね

「うるさああああい！」

勇者達は、下にどんどん落ちていくのでした

一方黒魔術協会では

「今度こそ、白魔術協会を滅ぼすぞ！」

黒魔術協会は、白魔術協会と違って  
豪華なお屋敷なのでした

「でも、白魔術協会は、強敵だからな・・・今回は、助っ人を頼む  
事にするか・・・」

そう言うと、黒魔術師は呪文を言いました

「我が盟約の言葉により、私に力を貸せ、召喚！」

黒魔術師が、そう言うと、突然悪魔？が出てきたのでした

「はっはっは！我を呼んだのはお前か？我の力が欲しくば・・・」

「なんか生意気な者が出てきたな？、封印してやるか」

「な！ちよ、ちよつと待て！悪ふざけしたんだ！すまぬ！」

悪魔は、雑魚キャラに近い存在ですからね  
封印されるのが、嫌なんでしょうな

「じゃあ、私の命令は聞く事、これは絶対条件だぞ？」

「うち、解ったよ、やりや〜いいんだろ？おっさん」

「おっさんだと〜？やっぱ封印する！」

そう言つて、黒魔術師は何か呪文を言おうとする

「わ〜！待て！私が悪かった！命令は聞きます、ダンディなお・じ・  
さ・ま」

悪魔は、気持ち悪い笑顔を浮かべながらそう言いました  
これは、ちよつと嫌な感じがしますね〜

「よし、早速白魔術協会を滅ぼすぞ！」

「解った、ダンディなおじさん」

こうして、黒魔術師と悪魔は手を組んで、白魔術協会を滅ぼそうと  
するのでしたw

さて、勇者達はどうなったんでしょうね〜？落とし穴に落ちたんだ  
から

無事では無いと思いまよげどね

↳第二十八章↳白魔術協会のアジトの話↳(後書き)

落とし穴・・・勇者たち、災難ですねW

〜第二十九章〜白魔術師の少女のお話〜

さてさて、前回、勇者達は暗黒の世界にまっさかさまなのでした  
もしかして死んだのかな？かわいそうですね〜 なむ〜

「勝手に殺すな！」

おやあ？どうやら、生きてたみたいですね？  
うち・・・死んだと思ったのに・・・

「おい、かなりむかつく事言つたる！なあ！」

いえいえ言つてませんよ？

まあそれは置いといて、勇者達は地下に辿り着きました  
まあ、落ちたんだから地下に着くのは当たり前なんですけどね〜

「おい、大丈夫か？」

「はい、何とか・・・でも、結構足場が悪いですね？ここ」

「勇者様〜！」

僧侶は、何かに気がついたらしく、勇者に言つのでした

「何だ!どうした!」

「前に鉄格子てつこうしが見えます」

「何!?!?」

勇者は、早速確認しました

確認しても、鉄格子は消えないんですけど  
まあ、鉄格子はちやくんとあったのでした

「なあ、これってもしかして・・・」

「勇者様・・・多分考えているの、同じだと思います・・・」

「これって、ろ・う・や見たいですね?勇者様?」

「そのままそっくり言うんじゃないか~~~~!考えないようにしてたの!」

勇者は怒りました、まあしょうがないですよね  
正義の者達が牢屋入り、何て面白い展開

「そう言っていないで、助ける!」

え〜？助けちゃうと面白くないじゃないですか〜  
だ・か・ら、私は見て見ぬフリをしますね

(ムカツク・・・いつか泣かす！)

勇者達が牢屋で、騒いでると誰かやって来るのでした

「あつはっは！ついに引つ掛かったわね！黒魔術師さん達！」

やって来たのは、白いローブを着て、金髪の髪をしている少女でした

「黒魔術師さん達・・・ってなあ・・・」

「私達、そんなんじゃないんですけどね〜」

「何言ってるんですか！貴方！私達は、正義を愛する勇者メンバー、  
何ですよ！」

(正義を愛するって・・・その中にこの俺も入ってるのか・・・)

勇者は心の中でツッコミましたが、まあ無視しましょう  
僧侶がそう言くと、金髪の女性はこう言いました

「ほ〜？じゃあ貴方達は正義の味方と言うのね？  
だったらその証拠を見せて見なさいよ！」

「解りました！さあ勇者様、この者に正義の何たるかを解らせてや  
ってください」

「ええ！俺がかよ！？じゃ・・・じゃあ・・・」

勇者は、久々登場、名前入りの服を彼女に見せました

「ほらこれ見てみるよ！勇者って書いてあるだろ？

普通はこんな恥ずかしい格好で歩かないって！

それでも俺はこれを着て旅をしているんだ！解るだろ！？」

解るだろって言われましてもね？彼女は理解するのでしょうかね  
？

彼女は、うーんと考えた後、こう言いました

「どうやら本当に正義の味方みたいね・・・

よく考えてみたらそんな格好で外歩いたら、絶対に注目をあびるも  
んね・・・解った、ここから出してあげるわ」

「そうですよ、やっと解つてくれましたね」

「なんかもうどうでもいいや・・・」

勇者達は、何とか牢屋から出る事に成功したのです

「そう言えば自己紹介がまだね？」

私はヒカリ、白魔術協会のメンバーよ？よろしくね？」

「俺は勇者、これは嘘言っていない・・・」

「私は勇者様と一緒に旅する魔法使いです」

「私は、正義を愛する熱血僧侶です～よろしく」

皆が自己紹介をしていると、白魔術師がやって来たのです

「大変だ、黒魔術師がこっちに向かって来ているぞ！ん？ヒカリ、その者達と仲良くなったのか？」

「まあ、そんな感じかな？」

「仲良くなんかってね～！」

「まあまあ勇者様、そう怒らずに」

「それはそれで都合だ、早速黒魔術師を成敗しに行くぞ！協力してくれるな！」

白魔術師は、勇者達と一緒に戦えと言っているのですた  
どうします？？勇者様？

「やるよ、もう・・・勝つてこの街から抜け出す」

「じゃあ早速成敗しに行きましょうか？勇者様」

「正義の力、存分に出して見せます！行きましよう勇者様！」

勇者達は、地上にバトルしに行くのでした・・・

↳第二十九章↳白魔術師の少女のお話↳(後書き)

結局、振り回されていますねW勇者達・・・

〜第三十章〜白魔術師と黒魔術師の戦いのお話〜

さてさて、前回、勇者達は牢屋に入り、ヒカリとであったのでした  
それにしても牢屋入り、あははは

「笑うな！こら！」

まあ、それは置いといて、勇者達は地下から外に出たのでした  
外で待っていたのは、黒魔術師と何所かで見慣れた奴がいるのでした

「あれ？なんかどつかで見た事ある奴だな？」

「そうですね？勇者様、旨く思い出せないんですけど、何所かで会  
ったような気もしますね？」

「勇者様、そんな奴ほつといて、さつさと黒魔術師を退治しちゃい  
ましようよ？」

「そうだな」

「くおら〜〜〜！無視するな〜〜〜！」

悪魔は、怒っています、まあ当然ですよね  
思いつきり無視されたら、私だって怒りますからね

「我の名は悪魔、魔王様に仕える者だ、よく見たらお前らは勇者の

「味ではないか！」

「あ、そうか」

勇者は、手をポンと叩いて何かを思い出した

「そうそう、確かやられ役の悪魔だったな」

「そうですね、あんまり登場してないから忘れてました」

「誰かと思ったら雑魚キャラの悪魔じゃない、らつくしよ」

「誰が雑魚キャラだあああ！、許せん！ぶったおっす！」

「私も白魔術師を倒す為ここに参った、勝負！」

「やってみろ、手加減なしで白魔術師の方が偉大って事を解らせてやる」

こうして、悪魔VS勇者達、黒魔術師VS白魔術師となったのでしたん？一人忘れていたような気がしますね？

「私はどっちに加勢したらいいのかしら？まあ、とりあえず様子を見ましようかね・・・」

ヒカリは、そう呟いているのです

勇者達VS悪魔

勇者達は、悪魔と戦う為、武器を構えたのでした  
でも、よく考えると三対一は卑怯と思うんですけどね

「五月蠅い！勝てばいいんだよ、勝てばな！」

「勇者様、防御は任せて下さい！」

「いつくよ〜」

「やってみる！はああああ！」

悪魔は力を貯めています、勇者達はチャンスと思って攻撃しました  
やっぱり卑怯ですね

「食らえ！流星斬！」

「エターナルアクアブルー！」

「クロスハリケーンアップ〜〜！」

勇者達は、悪魔に向かって攻撃しました

悪魔は、力を貯め終わったらしくこう言いました

「こんな攻撃避けてみせる！スピードイリュージョン！」

「何！？」

勇者達は、驚いたのですwそれは何故かって？それはですね？  
悪魔の姿が何十人に分身して、本物が解らなくなったからですよ

「どれが本物？」

「くっ、どれが本物だ……」

「勇者様、ここは私に任せて下さい！」

魔法使いはそう言って、杖を持ち呪文を言うのでした

「自然の大地の力よ、私に力を……ブロックジャッジメント！」

魔法使いがそう言うと、地面が動いて、砂とかが悪魔に襲い掛かるのでした

「な、何だこれは！」

「喰らいなさい！雷の力、私に力よ……ファイレストボルト！」

あゝ、それはやりすぎかと……

魔法使いは、悪魔に向かって雷をどんどん落としていったのでした  
普通はこんな攻撃喰らうと生きてはられないと思うんですけどね

「どう？これが私の力よ……？」

いや、そう言っても悪魔は塵も残ってませんって  
凄すぎですよ、貴方

「何か知らんけど、勝ったみたいだな・・・こうなると悪魔も」

「悪魔も何ですか？勇者様？」

「いや、何でもない・・・」

（こうなると悪魔も災難だな・・・）

勇者はこう思っているのです

その光景を見ていたヒカリは・・・

「あの子・・・何者なの・・・」

ヒカリは、啞然としていたのです

一方、白魔術師と黒魔術師はと言いますと

白魔術師VS黒魔術師

「決着をつけるときがきたな」

「ああ、お前なんかはこの私がやられるか、喰らえ！」

黒魔術師は、いきなり呪文を唱えると、白魔術師に攻撃するのです

「喰らえ！ダークジェノサイド！」

黒魔術師は、白魔術師に闇の刃で攻撃したのです

「何の！ホワイトガード！」

白魔術師は、バリアを展開しそれを避けています  
そんな攻防戦が数時間も続きました  
あの〜いい加減決着つけてくださいよ？

「解ってる！私が負ける訳が無いからな！」

「私もだ、こんな奴に負けてたまるか！」

その光景を見ていた勇者達はどう言っていました

「何か俺達関係ないか？」

「そうですね？このままこの町を出ましようか？勇者様？」

「そうだな、じゃ俺達は、旅を続ける事にするから、じゃあな」

「そうですね〜、ではこの町からとっとと出ましよう」

こうして、勇者達は、魔法使いの集う町「マフーガ」から立ち去って行くのでいた

結局白魔術師と黒魔術師の戦いは、どうなったのかというと？  
お互い大怪我して勝負つかなかったのでしたとき、あははは

「そこ！笑うんじゃないわよ~~~~~」

〜第三十章〜白魔術師と黒魔術師の戦いのお話〜（後書き）

悪魔、災難ですねえw

〜第三十一章〜海のお話〜

さてさて、前回勇者達は、魔法使いの集う町「マフーガ」を離れ別の地に辿り着いていました。でもここって？もしかして

「なあ、ここって……」

「勇者様、ここは……もしかして……」

「海だ〜〜広い海〜」

そう、勇者達はと言う訳か、海に着いていました

何故かって？それはですね〜偶然に辿り着いたみたいですね

「こんな場所に来て、一体何をしろと……？」

「そうですね……、私達、一応魔王を倒す為に旅をしているのに何故、こんな場所に辿り着いてしまったんでしょうね……？」

「まあ何でもいいよ、海は海、真っ青な海さ〜って遊ぶぞ〜」

僧侶は遊ぶ気マンマンでした

あの、貴方達は一応旅の途中なんだからこんな場所で遊ぶな！つて思いますね

「五月蠅い！来てしまったのはしょうがないだろ！」

「そうですね、とりあえず色々見て回りましょうか？勇者様ほら、何か海の家らしき物もありますしね？」

「わーい」

僧侶は、いきなり海に飛び込みました

服を着たまま入ったので、重いと思うんですけどスイスイ泳いでいます

河童ですか？

「俺に聞くな・・・」

「まあまあ勇者様、海の家で休憩しましょうよ」

「来てしまったのはしょうがないな、少し休むとするか」

こうして勇者達は、海の家に行く事にしたのでした  
一方その頃、暗黒城では・・・

「まだ勇者達を倒してないのか！」

「す、すいません」

魔王は、怒っていました

まあ、私はこう思います、倒したいんだったら自分で行けよ？と思いますね

「だったら、魔王様が直接行けばいいのに・・・」

悪魔はそう呟きました、おや？どうやら聞こえてしまったみたいですよ？

「何だと？我は魔王だぞ！魔王と言えばラスボス、そうラスボスなのだ

だから最後に正義の者と戦うって言うのが筋なのだ！」

魔王は、そう言っています

まあそれがRPGの鉄則？ですからね

「解りました、じゃあ私が勇者達を倒しに行って参ります」

悪魔は、この場にいると何されるかを恐怖し、外に出て行ったのでした

「解ればいいのだ・・・さて、人生ゲームの続きでもするか・・・」

ありゃ？どうやら魔王は、まだ人生ゲームにはまっているみたいですね〜w

あははは

こうして、悪魔は、無謀にも勇者達の所に向かっていったのでした  
一方その頃勇者達はどうかと

「なあ・・・これ・・・」

勇者達は、海の家「ア、クアハウス」と言う店の中に入っているの  
でした

「これ・・・不味いですね・・・」

「だよな・・・」

勇者と魔法使いは、そのお店で出された

「美味、海選焼き定食」を頼んで食べてそう言っているの  
でした  
でも、そんな事言っていると、お店の人に失礼ですよ〜？

「不味いもんは、不味いんだ〜！」

それを聞いた店員は、勇者達の方を見てニヤリと笑ったのでした  
それを見た勇者は、驚き、魔法使いを連れて急いで海の家から逃げ  
て行ったのでした

「やっぱり海は、気持ちいい〜」

僧侶は、まだ海の中をスイスイ泳いでました

「あははは〜・・・ん？」

僧侶は、海の中で何かを見つけました  
それは、何なのか？それはまだ解りませんでしたとさ

く第三十一章く海のお話く（後書き）

海にたどり着きました、なぜでしょうねw

〜第三十二章〜海の中で城発見のお話〜

さてさて、前回、勇者達は何故か海にたどり着いていました  
そして、海の家「ア、クアハウス」を訪れ、逃げたのですた  
そして、海の中で僧侶が何かを見つけたみたいですね

「はあっはあ・・・一体何だったんだ・・・あの店は」

「そうですね・・・でも勇者様？何で逃げたんですか？」

「う・・・それは・・・」

怖くて逃げた、ですよね？あははは

「言っな！こらー！」

「ゆ～～～う～～～しゃ～～～様～～～！」

僧侶が、海からやって来て、勇者達に言っのでした

「何だ？どうした？」

「海の中で・・・お城を発見しました」

「は？」

「え・・・？」

勇者と魔法使いは、沈黙しました  
ま、当然と言えば当然ですよ

「お・・・し・・・ろ？」

「はい、それはもう立派なお城ですよ、まるで偉い方が住んでるよ  
うな」

「勇者様、私・・・海の中にお城が存在するのって聞いた事ないで  
すよ？」

「俺もだ・・・もしかして・・・伝説の・・・？」

勇者は、何かを思いついたようですね  
一体何かな？

「勇者様？伝説って何ですか？」

「昔、聞いた事あるのだが」

何である若者が海の中に城を発見して使いの魚がその者をその城へ案内したと言われているんだ

それが竜宮伝説と呼ばれていたんだ、俺は信じて無かったけどな？」

「そんな伝説ですか・・・、あ、でも勇者様？その若者は一体どうなったんですか？」

「さあ？俺、真面目に聞いてなかったし、覚えてないな」

おいおい、人の話ぐらい真面目に聞けよ？とか思いますね

「勇者様？じゃあ行ってみましようよ？きっと何かありますって」

「は？しかしだな？どうやって行くんだ？泳いでか？」

「あ・・・そうですね・・・行くのでしたら、泳いで行くしかないですね？どうします？」

勇者達は、どうしようか考えました、そして導き出された結果はこうなりました

見なかった事にして、とっとと魔王退治に行こうと、見つけた意味がないですね

「そんなもん忘れて、とっとと魔王退治に行くぞ！」

「了解致しました、でわ行きましようか」

「せっかく見つけたのにな、まあいいか」

勇者達は、見なかった事にして、先を急ぐ事にしたのでした  
一方その頃、城の中では・・・

「ふっふっふ、勇者達め、この城にやって来たら最後だって事を解  
つていないな？」

城の中にいたのは、悪魔でした

悪魔は、不気味な笑いを浮かべた後、こう言っています

「このトラップ満載で、武装満載の城にやって来たら、勇者達も降  
参するだろう！」

あっはっは！、さあ、来てみる！勇者達、このシーサイドキャッス  
ルに！」

悪魔は、そう言っています、しかし勇者達は一向に着ません  
まあ、勇者達は別の所に行っちゃってますから、来る筈ないんです  
けどね

「可笑しいな・・・わざわざ見える位置に建てたのに。何故来ない  
んだ・・・？」

悪魔は何時間も待ちましたが、全然来ません

そして、この城はどうなったのかというと？海水が浸水して粉々に  
破壊されたのでしたとさ

ちゃんちゃん

「このままでは、終わらんぞおお〜〜!!」

いや、ばっちり終わってますって

勇者達は、何事なく海から、離れて行ったのでしたとさ

〜第三十二章〜海の中で城発見のお話〜（後書き）

悪魔、災難ですねえw

### 〜第三十三章〜高い塔の話〜

さてさて、前回勇者達は海に来ていました  
そして、直ぐに立ち去って移動したのです  
一体何所に向かっているのでしょうか？

「知るか！でも、魔王がいる場所へ向かっている事は確かだ」

勇者達は、歩きました

かなり歩きました、そして疲れる程歩いて、塔に辿り着きました

「あ、勇者様、高い塔がありますよ？」

「本当だ・・・随分歩いたからな？ちょっと休むか？」

「ねえ勇者様？この塔を上って、辺りを見渡せば  
魔王のいる場所が解るのでは？」

僧侶はそう言いました

「は？上るの・・・」

は？上るの？っておいおい  
貴方は正義の者でしょ？だったらさっさと情報を知った方がいいん  
じゃないですか？

「つち！解ったよ！上れば良いんだろ？上れば！」

物分りが良くていいですね

勇者達は塔を上る事にしました

頂上

「うわ〜いい眺めですね〜」

「そりゃそうだろ！」

勇者はそう言います、それは何故かって？

それはですね〜地上から五十メートルは離れているからですよ〜  
落ちたら一発で終わりだからですね

「高すぎだろ・・・いくらなんでも」

「でもいい景色ですよ？下を見なければ」

「いやそんな笑顔で言われてもな・・・」

勇者がそう呟くと、僧侶が何かを見つけたらしく  
勇者に言いました

「勇者様々、なんかこちらに飛んでくる物体がありますよ?」

「は?」

勇者は、僧侶の指す方向を見ると  
悪魔?が塔に向かってきたのでした

「お、お前らは勇者メンバー!何故この塔にいる!」

「いや、何故って・・・たまたま」

「はあ?」

悪魔は普通に驚いています  
まあ、当然ですよ

「悪魔!貴方は一体この塔に何しに来たの!」

「魔王様に勇者達の討伐を命じられたのだ  
そしたら偶然にあうとはな?勇者覚悟!」

悪魔は、襲い掛かってきました  
どうします？勇者様？

「どうするってな？倒すしかないだろ・・・」

「勇者様、倒しちゃいましょう」

「そうですね！こんな雑魚、瞬殺ですよ」

おいおい・かなり酷い事言ってますね

「なんだと！ならやってみろ！」

ほらほら、悪魔はかなり怒ってますよ

「ダークファイヤー！」

悪魔はいきなり手から火を出しました  
あゝ？考えて技使ってますか？

「おい！こんな所で火をだすな！」

「なんだと？」

「塔が燃えます〜!」

「きゃ〜〜!」

その通りなのでした

悪魔の攻撃により、塔に火がついて炎上したのでした

「おい!逃げるぞ!」

「了解しました!勇者様」

「さっさと逃げます〜!」

「あ、こら!待て!逃げるな!」

悪魔は、脱出しようとする勇者達を追いかけました

そして傷を負いながら追いかけて、何とか勇者達に追いつきました

「やっと追いついたぞ・・・勝負だ・・・!」

悪魔は既にぼろぼろです

チャンスですよ、勇者様！

「そんな事は解ってる！食らえ！流星斬！」

勇者は、剣を構えて悪魔に切りかかりました

「ぐはあ！魔王様〜！お役に立てずすまぬでござる〜〜〜！」

「ござるって・・・忍者ですか？」

悪魔は、そう言って消滅しました

「勇者様の勝利です〜」

「結局なんの情報を得られなかったな・・・」

「いえいえ、大収穫ですよ？勇者様？」

魔法使いはそう言いました

「一体何が大収穫なんでしょうね〜？」

「何が大収穫なんだ？」

「それはですね？悪魔の飛んできた方向を進めば魔王の居場所に辿り着くって事です」

「そうかじゃあ悪魔の飛んできた方向私、覚えていきますから行きましょう！勇者様」

「そうだな・・・、行くか！」

こうして、勇者達は悪魔の飛んできた方向に行く事にしたのでしたそして・・・

「おい！進めないじゃないか！」

「ほんとですね・・・」

「空から来たんだから、地面は関係ないですもんね・・・」

勇者達は早くも止まっていましたそれは何故かって？それはですね、物凄い高い崖に辿り着いたからなんですよ

「この崖を上るか？」

「そうしなきゃ進めないのなら、上るしかないですね？」

「辛そうだけど上るしかないのかな・・・？」

勇者達は、その場で考えました

そしてどうするのか？それはまだ解りませんでしたとさ

く第三十三章く高い塔の話く（後書き）

まだまだ続きます

〈第三十四章〉大きな崖の話

さてさて、前回勇者達は、物凄い高い崖の所にいます、一体これからどうするのでしょうかね？

「そんなの解るか！」

勇者達は、崖の前で立ち止まっています、私的にはさっさと先に進めよーら

と思いますが、それは言わない事にしておきます

「勇者様？どうします？」

「そつだな・・・」

「この先に魔王がいる事は間違い無いんですが・・・この高い崖をどうするかなんですよ・・・？」

「そつなんだよな・・・一体どうすれば・・・」

勇者が悩んでいると、僧侶がこんな事を言いました

「勇者様？まず私がこの状況を何とかしてみます」

「解った、やってみて」

「はい！はあああ！」

僧侶は、拳を構えると力を込めたのでした

「はああ！ミラクルショットアタック！」

僧侶は、突撃しながら崖に向かって拳を連打しました

「勇者様！ほら、穴をあけました！」

確かに崖には、いくつか穴はあきました、でもあけてどうするの？

「あけただけじゃ何も解決しないだろ……」

「はっそうですね？すいませ〜ん」

「やっぱり地道に素手で登るしかないか？」

「そうですね．それでいきましょう」

結局、勇者達は素手で登る事にしました  
そして数時間後

「はあ、はあ、何とか頂上に着いたな」

「はい、かなり疲れましたが何とか着いたみたいです」

「勇者様〜！あれ、なんか建ってますよ〜？」

僧侶は、何かを見つけて勇者に言うのでした

「あれは・・・城？」

「なんかぼろそうな城ですけど、邪悪なオーラを感じます！」

「勇者様？もしかしてあそこに魔王がいるんじゃないですか？」

「そうかも知れない、だが、行ってみないと解らないぞ？」

そんな事言っていないでさっさと行けよ？こら

「む、・・・良し行くぞ！」

「はい、解りました！」

「魔王覚悟〜！」

勇者達は、元気いっぱいにお城に向かうのです

一方その頃魔王は何をしているのでしょうか？

「魔王様〜」

悪魔が魔王に何かを伝えにやって来ました

「ん・・・何の用だ？」

魔王は、椅子に座ってポーズを付けながら悪魔に言うのでした  
カッコつけてますね？

「間もなくこの城に勇者達がやって来ます！  
肉眼で見えました！いかなさいますよるか？魔王様」

「勇者達がここにやってくるか・・・  
もちろん、我を倒しに来たのは解っている  
だから我は全力で勇者達に立ち向かうだけだ  
ところで・・・今、勇者達は何をしておる」

「はい、申し上げますと・・・寝ています」

「は？」

魔王は驚きました

まあ、当然ですよ

勇者達は崖を上って疲れたらしく、すやすやと眠りについているの  
ですからね？

「なら好機じゃないか！さっさと退治しに行つて参れ！」

「しかし、武器といえそうな物が一つも無いんですよ？  
どうやって戦えばいいのですか？」

「む・・・ならしょうがない、我も出向く  
それでいいだろ！」

悪魔「「りよ、了解です」では行って参ります！」

こうして、魔王と悪魔は、勇者達の所に向かうのでした  
見習い勇者のラストバトルが、始まりを告げるのでした

〜第三十四章〜大きな崖の話〜（後書き）

次がラストです〜

〜最終章〜最後の戦いの話〜

さてさて、勇者達は、遂に魔王がいると思われる城がある場所にたどり着きました

おや？城の方面から何かやって来る見たいですよ？

「魔王様、奴らが勇者達です！」

「うむ」

やって来る者は、悪魔と魔王でした、さあどうする？

「なあ、一つ聞きたいのだが？」

「なんですか？魔王様？」

魔王は、言いました

「一体何を聞くのでしょうか？」

「こいつら、本当に勇者達か？思いつきり寝てるんだが？」

そうなのでした、魔王がそう言うのも無理がありませんね？

だって勇者達ったら爆睡しているから、そう言ったんですよ？

「確かに……、でも間違い無く勇者達です、だって……これ見てくださいませ」

悪魔は、勇者の事を指差しました

「この格好見て下さいよ？勇者って書いてありますよ？」

「む？確かにそうだな」

確かにそうなのでした、勇者の胸の所に勇者って書かれてあるのでした

はつきり言ってかなりおかしいです

「よし、先制攻撃を開始する」

魔王は、勇者に攻撃しました

「うーん」

勇者は、寝返りをして魔王に攻撃したのです

魔王ったら、避け切れなくてもろに食らったみたいですね？

「だ、大丈夫ですか？魔王様」

「何とかな……でもな……とつとと起きる！」

魔王は、蹴り倒して勇者を起こしたのでした  
随分と乱暴な起こし方ですね

「いつて……ん？誰だお前……」

「勇者様どうしたんですか・・・」

「ん〜？まだ眠いです・・・」

「ようやく目を覚ましたようだな？我は魔王

勇者よ、お前を滅ぼしにこちらからやってきたのだ！」

魔王はそう言いました。目を覚ましたじゃなくて

無理矢理起こしたくせに、何を言ってるんでしょうね〜？

「魔王？本当に魔王か？」

「確かに〜、本当に魔王だったら、凄い事が出来る筈です〜」

「な、何だ？凄い事とは？」

魔王がそう言うと、僧侶は満面の笑みを浮かべてこう言いました

「そうですね〜？例えば、目からビームとか出て

瞬間移動できるとか、超能力とか使えるとか〜」

「んなもん出来るかああ！」

確かに普通の人間では、絶対に出来ない特技ですよ〜

でも出来たら化け物？って感じがしますよ、はい

「さっきから聞いてれば、魔王様を馬鹿にして・・・許さん！」

悪魔は怒って、勇者達に攻撃してきました

「いきなり攻撃かよ・・・でも！やってやるぜ！流星斬！」

勇者は、素早く剣を抜いて、切りかかりました  
悪魔は真つ二つに切り裂かれ、消滅しました  
はつきり言って・・・かなり弱いです

「このままでは終わらんぞ〜〜！ぐはああああ！」

いや、終わってますよ？ばっちし

「我一人となつたか・・・だが、我は負けん  
我は魔王なのだから・・・ふははは」

魔王はそう言っています

勇者達は、どうしようか迷ってますね？

「なあどうする？こいつ・・・本当に魔王か？」

「うん・・・どうだろ？もしかして魔王になりきってる唯の変人  
かも知れないし？」

それは言いすぎだと思いますけど？

「我を唯の変人だと・・・？許さん！はああああ！」

魔王は力を溜めました、その場は暗くなり  
稲光が発生して、いかにもラスボス？っていう雰囲気を出している  
のでした

「我を怒らせたからには・・・生きては帰さんぞ！いでよ！ダーク  
エンパイアブレード！」

魔王がそう言うと、何も無い空間から一本の黒光りする  
怪しい長剣が出現したのでした

「もしかして・・・本当に魔王？」

「見たいですね・・・」

「魔王と解ったら、倒しましょう！勇者様！」

「ああ・・・そうだな！」

勇者達は、戦闘態勢に入りました  
魔王は、それを見てこう言いました

「お前達の腕は水晶球で見えていた、どうだ？我に従わないか？  
従ったら世界の半分をお前にくれてやろう・・・」

なんかどっかで聞いた事のあるような台詞を、魔王が言いました  
勇者達はどうするのか？

「んなもん・・・断るに決まってるだろ！」

「そうです！私達は貴方を倒す為に旅をしていたんですから！」

「二度と復活出来ないように、倒しちゃいます！」

「それが貴様らの答えか・・・なら、死ね！」

魔王は、勇者に向かって切りかかってきました  
勇者は剣で防戦しました

「何の！このくらいでくたばる俺でも無い！」

「威勢だけは良いな？だが何所まで持つかな？はあああああ！」

魔王は、力を入れました、剣圧で周りの草花とかが吹き飛んで  
辺りは砂地と化しているのです、はつきり言って凄い事になります

「勇者様、加勢します！エターナルアクアブルー！」

「効かぬわ！」

魔法使いの魔法攻撃を片手で、消滅させました  
魔法使いもはつきり言って驚いています

「な・・・私の魔法が・・・片手で・・・」

「なら！これならどう！クロスハリケンアッパー！」

僧侶は、拳に力を込めて殴りかかりました

「どうした・・・その程度なのか？」

「え・・・嘘でしょ！？」

僧侶は驚きました、それは何故かですって？それはですね

魔王は防御も一切しないで、喰らったのにノーダメージだったから  
なんですよ〜

「勇者達の力はこの程度なのか？」

「何を馬鹿な！俺にはな？秘奥技があるんだ！」

「は？」

魔王はそれを聞いて驚きました、私も驚いてますよ〜？  
いつの間にそんな奥技を身に着けていたんですか？

「これは祖父・・・つまり先代の勇者から教わった奥技！  
今、お前に喰らわせてやる！喰らえ！必殺！」

「な・・・なんだと！待て・・・」

「もう遅い！秘技！流星胡蝶乱舞剣！」

勇者は、回転しながら無数に魔王に向かって切りかかりました  
魔王は防ごうとしましたが、勇者の圧倒的なスピードで避けきれず  
全て命中したのでした

「ぐはああ！まだだ・・・」

「これで最後よ！光の力、疚やましき悪を打ち滅ぼしたまえ！シャイングスター！」

魔法使いの呪文が綺麗に決まって、魔王は叫びながら消えていくの  
でした

「ぐ・・・ぐはあああ！またいつの日か！復活してやる・・・」

そう言って魔王は消滅したのでした

「また何度でも倒してやる・・・これで世界に平和が訪れたな！」

「はい！やりました！魔王を倒しました！」

「これで皆さん安心して暮らせます」

「ああ、そうだな」

こうして、勇者達は見事魔王を倒したのです。魔王が消えた事により、悪魔や魔物達が消滅して世界に平和が訪れたのでした・・・その後、勇者達はどうなったのかというと・・・

「なあ！なんでこんな修行しなくちゃいけないんだよ！親父！」

勇者は自分の家に戻り、魔王を倒したって知らせたけど何故か父親に「日々の鍛錬がお前を強くするのだ！」と言って結局毎日修行をさせられているのでした、はつきり言っただけですw

「そう思うんなら助けるよ・・・」

一方、魔法使いと僧侶はというと・・・

「はい、ここはこうやってやりますよ！はあ！」

僧侶は、教会に戻りシスターとかに護身術よwと言って武道を習わせているのでした。魔法使いはそれで怪我した者の手当てをしているのでした

「これじゃ・・・私が僧侶みたいなものね・・・」

魔法使いはそう呟いているのです

こうして、見習い勇者の旅は、終わりを告げたのでした……

〜最終章〜最後の戦いの話〜（後書き）

終わりです〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3240q/>

---

見習い勇者

2011年5月6日18時27分発行